The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム 10

慶應義塾大学の教育カリキュラム研究③
これでいいのか？　日吉のカリキュラム
—授業評価・半期制…カリキュラムに関する教員アンケート2011結果から—

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター

第 10 回シンポジウム
「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究③
これでいいのか？　日吉のカリキュラム
――授業評価・半期制…カリキュラムに関する教員アンケート 2011 結果から――」

2011 年 7 月 11 日（月）18:15 ～ 20:00
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階　シンポジウムスペースにて

Program

	司会　佐藤　望（商学部教授）
18:15　ご挨拶	不破有理（経済学部教授）
18:20　発表	佐藤　望（商学部教授）
	木島伸彦（商学部准教授）
	石井　明（経済学部教授）
19:10　コメント	金田一　真澄（理工学部教授）
	長谷山　彰（常任理事）
19:20　ディスカッション	

はじめに ——新陳代謝のすすめ

教養研究センター所長　不破有理

2010年度に義塾学生総合センターが実施した学生生活実態調査によりますと、学生が慶應義塾に入学を決めた理由の上位は、第一に「義塾の教育・研究の内容に期待」し、次に「社会的評価が慶應義塾は高いから」と考え、さらに「就職に有利であること」をあげています。現在のところ、入学した6割以上学生が、総合的には「満足」と答えているので問題はないかのように見えます。満足度が4年になって高くなっているのは、おそらく義塾の社会的評価のおかげで、しかるべき就職先に落ちつけた結果と読めるかもしれません。満足度の内容を吟味してみますと、大学全体への満足度はおおむね高いものの、授業・講義について特化してみると、満足度は五段階評価の3.33となり、さして高いわけではありません。この数値は教育を預かる一員として、決して現状は安泰と楽観できる値とはいえないのではないでしょうか。

日本の戦後は驚くべき復興を成し遂げました。日本の生活は世界に類のないほど利便性が高い安全な国となり、国民の満足度は中流の幻想という言葉があったほど以前は特に高かったのです。しかしながら、2011年の3月11日はすでに傾きつつあった長い戦後の価値体系の崩れに拍車をかけ、パラダイムシフトという言葉では言い表せないほどの変化が迫っているように思います。人は60兆の細胞から構成され、その90%が1年で入れ替わるのだそうです。替わっても人は変わりませんが、替わらなければ人でなくなるのです。今回のシンポジウムのタイトルは挑発的です。「これでいいのか？　日吉のカリキュラム」と名付けたのも、新陳代謝のためにはカリキュラムの変動性を常に問う必要性を皆さんと共に考える機会としたかったためであります。

2011年春に教養研究センターが実施した教員を対象としたアンケート結果では「考える力を陶冶すること」が大学の教養教育の目的であるとの回答を得ました。少なくともアンケートに回答した教員の方々は今の学生に必要な力は考える力であり、考える力をつけるための教育にご尽力いただいているものと思います。個々の努力に加え、制度上の変動も場合によっては必要でしょう。

おもに1、2年生が学ぶ日吉キャンパスは専門科目に進む前に、受験勉強から解放され、さまざまな学部の学生が共に学べる環境にあります。学生は何を思い、何を学びに大学に足を運ぶのでしょうか。学生が感じる不安や悩みの第一位は、「学業についての不安」を上回り、「就職や将来の進路について」であり、学部平均で60%を超えています。すべての学部・学年を通じて高い比率を示しているのは当然と言えば当然ですが、ややもすると、就職のためには何をすべきか、という逆算の発想から学生自身が金縛り状態にあるのではと危惧しています。社会に出るまでの通過点としてのみの役割を自任しているわけには大学もいられない状況が近いのではないでしょうか。義塾に入学する学生が「教育・研究の高さ」を期待しているのは当然のことで、大学は鮮明に教育・研究を学生に還元する意識を持つ必要があると言えます。個々の教員の努力に加え、おそらく制度面、運用面での大きなカリキュラムの枠組みの見直しが必要かもしれません。学生が生き抜いていくために身につけるべき考える力、その育成のために教員はなにをどのように実行していくべきなのか、教養研究センターでは考え、シンポジウム、セミナーで公開議論の場を設けてまいります。徐々に温度が上昇するぬるま湯につかっているうちに、いつの間にか手遅れの事態に陥るという比喩が、地球温暖化防止策の遅れを揶揄して用いられたことがありました。地球温暖化抑止策として原子力が促進されてきたことを考えますと、微妙な比喩ですが、似たような状況が現在の日本の組織にも言えるのかもしれません。新陳代謝をし続けてこそ、生きることができるのです。

「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究③ これでいいのか？　日吉のカリキュラム
――授業評価・半期制…カリキュラムに関する教員アンケート 2011 結果から――」

司会	佐藤　望	商学部教授
パネリスト	佐藤　望	商学部教授
	木島伸彦	商学部准教授
	石井　明	経済学部教授
ディスカッサント	金田一真澄	理工学部教授
	長谷山彰	常任理事

佐藤望　お忙しいところお集りいただきありがとうございます。司会を務めます商学部の佐藤です。

慶應義塾基盤研究は 2003 年に開始され、日吉の教育の改善のためにさまざまな提言を行ってきました。そのひとつの成果が、学部共通カリキュラム委員会と、日吉カリキュラム検討委員会の設置です。これまで、共通科目について学部間で意思疎通をする機関がなく、ばらばらに行われていたのを、横のつながりを強化してより充実した授業展開を可能にすることが期待されています。さまざまな問題はありますが、日吉の授業の分野ごとの組織化の第一歩だと思います。

教養研究センター基盤研究・カリキュラム研究が 5 年前の 2006 年に出した提言は 28 項目におよびます。それらは、成績評価、セメスター制度、シラバス、共通科目のあり方、外国語のクラス編成、副専攻制度、人事とカリキュラム編成といったテーマに渡るものです（資料 1、20 頁）。

これらの 28 項目の提言は、2006 年に実施した学生アンケート調査に基づいて作成されたものです。それらのうち、いくつかは実現したものもあれば、全く動く気配がないものもあります。○をつけたものが、実現もしくはほぼ達成したこと、☆をつけたのが現在達成しようとしていること、△が一部で達成していることを、私の知りうる範囲でつけてみました。

カリキュラムの変更には長い月日がかかるのは仕方がないことです。時代が移り変わるにつれて、変えなければならないこと、変えてはならないことを常に教員間で論議し、あるいは時には学生も交えて論議することはとても大切だと思います。

今回 2010 ～ 11 年度の研究では、カリキュラムに関する教員アンケートを実施しました。これは、カリキュラム、とりわけ教養教育のカリキュラムに関わる教員がどのように考えているかということを明らかにしようというものでした。これらのデータを提示して、これからの学部教育、とりわけ教養教育のカリキュラムがどのような方向性を取るべきなのかを、先生方と語り合いたいというのが、今日のシンポジウムの趣旨です。

私が、はじめにアンケートの概要と、そのなかで注目すべき結果のいくつかについてお話しをします。次に、アンケートの解析を中心にやってくださった木島伸彦先生に、とりわけ授業評価の問題についてやはり興味深い結果が出ているのでそれを報告していただきます。3 番目に、日吉カリキュラム検討委員会の中長期グループで、さまざまな方向性をまとめてくださっている石井明先生に、現在日吉カリキュラム検討委員会で検討されていることやその課題について話していただきます。今日は、日吉カリキュラム検討委員会の委員長である金田一真澄先生と、学事担当の長谷山彰理事もご出席くださっていますので、コメントをいただいて皆さんと論議を行いたいと思います。

アンケート調査は、「教養教育の目的について」、「シラバス」、「講義要綱について」、「成績評価について」、「クラス編成」、「授業運営について」、「授業評価について」、「カ

リキュラム編成」、「半期制について」、「研究と教育」といった項目にわたっています。アンケートの集計のうち、全体の度数のみを記入したものが資料２（22-32 頁）です。また、今回の研究では、自由記述に力を入れてあります。ここには、各先生方が非常に熱心に記述をしてくださっています。自由記述の設問、問 13「シラバスについて」、「授業評価について」の問 38，39，41，42、「自由記述」の問 59 に関しては、トラスティアというこうしたアンケート調査の解析に使うソフトを使って、木島先生が解析してくださいました。記述の共通するキーワードをピックアップして集約しています。集計結果と、これらの記述内容を見ていくと、慶應義塾の教員像の一端が見えてきます。

私は、これらのアンケートをざっと見て、どのようなことが言えるかということを簡単にまとめてみました。資料３（33-34 頁）の「2010 年度　大学カリキュラムに関する教員アンケートの結果より」はそれをまとめてみたものです。今回のアンケートでは、学部によって教員数にばらつきがあることと、回収率もかなり差があります。体育研究所も回収率 50％で、SFC が 40％以上と高く、文学部が 150 名教員に対して 18 名の回答となっています。

アンケート結果について、少し特徴的なデータや注目すべきデータをピックアップします。

教員アンケート調査まとめ

教養教育の目的

佐藤望　教養教育の目的についてや、英語や語学については、あまり驚く結果は出ていませんが、具体的なスキルの習得より、考える力や判断能力を重視しているということは言えると思います。英語では、論文読解力が最も重視されています。英語を使って論理的な思考や批判的検証をさせたいが、なかなかそこまでの英語力が身についていない、というのが一般的な考えなのかなと思います（資料４、35 頁）。

シラバス、講義要綱について

以前、教養研究センター基盤研究が提言した電子化、システム化、学生部の方々の努力により現在実現しています。学生が自主的に作っている授業紹介雑誌があり、それについてのご意見も聞いてみました。これは内容の不正確さ、紹介授業の恣意的選択などの問題があり、学生の履修行動を歪めているものですが、これについては無関心か、容認といった態度が大半を占めました。

成績評価・クラス編成

問 19 の結果をご覧ください。成績評価について、プロセス重視と結果重視の評価では、結果重視と考える教員の方が、合計 60％で多くなっています。2006 年の学生対象のアンケートで同じ質問をしたことがありますが、学生の方はプロセス重視とする回答が 60％でちょうど逆の結果となっています（資料４、37 頁）。

授業後との成績評価のばらつきについて、問 20 では「問題ない」、「問題はあるが仕方ない」と現状を肯定する意見が、53％と半数以上を占めているのに対して、2006 年の学生アンケートで学生の方は、「問題ない」、「仕方ない」とする答えが、67％を占めている。これを諦めと取るか、教員との信頼関係がある程度醸成された結果と見るかは、解釈が分かれるところだと思います。

成績の相対評価（ABC の割合を決める）が望ましいと考える教員は、全体で 29％少数でした。これについて、ＳＦＣでは成績の相対評価を徹底していましたが、そのＳＦＣでは、「相対評価が望ましい」と答えた教員は全体の 34％でした（資料４、37 頁）。

成績評価については、これまでの基盤研究において、再三論議し、提言を出しています。その提言は、資料１の提言１～７にあるように、成績評価は授業の目的に基づき行われるもので、一概に相対評価が良いとか、絶対評価が良いとかいったものではありません。部会単位で共通認識を深めて、基準を明確にし、それをきちんと学生に提示して、透明性を高めるということが大切だと考えています。これまでは、教員が個人単位でやってきていますが、将来的に日吉カリキュラム検討委員会とその下部の各検討部会が、そのような機能を果たすことができると良いと思います。現在のところはまだ組織化がゆっくりと進んでいる段階です。

問 24、25 では、クラスレベルの統一や、シラバスの統一といったことについて尋ねています。同一レベル、目的同一のクラスが、同一のシラバスを使うべきであるかどうかについては、55％の教員がその必要はないと考えています。ただ、授業の目的や種類によっては、そのような教員間の意思疎通を密にして、統一的にやることが望ましいものもあると思います。スキル伝達系の授業で、履修者が分

かれ複数クラスが存在する場合などがこれに当たります。こうしたことが組織化されている学部、部会も多いですが、論議すらも難しい、あるいは組織母体がないというような状態は、改善していく必要があると思います。日吉カリキュラム検討委員会には、やはりそのような機能を実質的に果たしていくことが望まれると思います。

学部共通カリキュラム委員会、日吉カリキュラム検討委員会について

問46で、学部共通カリキュラム委員会、日吉カリキュラム検討委員会の役割や活動について、「知っている」という教員は、全体では41％ですが、日吉に限ると67％ですのでまずまずの浸透と言えないこともありませんが、1／3の教員がなんだかよく分からないという印象をもっているようです。これは、将来的に何かオーガナイズの変更を行おうとしたときに障害になる可能性があります。その後、各分野別の検討部会などが開かれていますので、もう少し浸透しているかもしれませんが、全体の動きについては、教授会・学部会議などでのアナウンスも含めて、報告をしていく必要があると思います。

また、教養研究センター基盤研究カリキュラムの提言は、80％の日吉の教員が「知っている」もしくは、「だいたい知っている」と答えています。全体では47％です。多くの教員が、これを横目では見てくれているということが言えると思います。

半期制について

2005年カリキュラム改革の目玉は、いわゆる現行の通年半期制の導入でした。これについての評価も今回聞いてみました。通年半期制について、かつての通年制度を知っている教員の69％が肯定的に評価しており、81％の教員が、「現状のまま」もしくは「問題点を改善しつつ維持させるべき」と考えています。

改善点として、秋学期履修登録を可能にした完全半期制にすることが挙げられます。積み上げ型の履修を可能にし、Ⅰ、Ⅱを連続して取ること、総合教育科目のうち一定数は、応用型のものを取らなければならないとする工夫も今後考慮に値すると思います。

しかし、問54に見られるように完全半期制にするべきだという教員は、比較的少数です。秋学期履修登録を可能にするべきだと考える学生の数は2006年の調査では、81％に上っており、これは教員の意識と大きな落差を生んでいます。

佐藤　望　氏

研究と教育

研究と教育の割合についても問55､56で尋ねています。最近では、新人の教員を雇うときに、「研究はしなくても良い」「仕事は教育である」と言われるケースがあると聞きます。慶應でも学務の負担が一部で増えてきています。きめ細かい学習指導、カリキュラム改革、半期制導入による成績評価の負担、授業期間の延長と、ここ十数年の慶應義塾も教育負担の増加の方へとシフトしています。これは、時代の流れである程度仕方がない面もあるかと思いますが、研究と教育が両輪として機能するということが、少なくとも慶應義塾のような一定の水準の学生を集めている大学には、絶対に必要だと思います。知のフロンティアを歩いている姿を学生に見せていくということが、大学教育の非常に重要な部分だと私は確信しています。ある同僚の若い教員と話していたときに、慶應はきちんと研究をしなさいという雰囲気がまだ残っているんですね、と感心していました。古いノートを使い回さずに新しい授業をする教員、先端の研究をきちんとやっている教員に学生たちも魅力を感じています。このようなリサーチ大学としての水準をきちんと保っていくことも、カリキュラムの改善課題をひとつひとつこなしていくことと同様に大切なことだと思います。

授業評価に関すること

木島伸彦　商学部の木島です。それでは引き続き私の方から、自由記述の中でも特に先生方の関心が高くて、内容も厚かった授業評価に関してまとめたものをご報告させていただきたいと思います。具体的な回答に関しては資料２「Ⅺ自由記述」（32 頁）のとおりですが、なぜこれらを選んだかというと、根本的に多くの先生に一番関心を持っていただいているのが授業評価だということ、それから授業の解析にも直結すること、また、現実問題として慶應内部、もしくは学部、キャンパスの中でも取り組み方や考え方が結構異なっているということもあるので、取り上げてみたいと思いました。

現状としては、SFC に関しては各学部ですでに実施されています。ですから SFC の先生方のご意見としては、「なぜこんなことを今さら聞くのだ」という意見や、「時代後れじゃないか」というご指摘もありました。法学部では、すでに始まっているという意見もありましたし、商学部では今年度から「やりなさい」というのではなく「できたらやってください」という柔らかい感じで進んでいます。

ここで、実際に自由記述からどのようなことが考えられるのか、これは私の観点からになるので、完全に主観的なものが入っていますけれども、これを報告させていただきます。まず授業評価ということで、今回のアンケートでは聞いていますが、自由記述の内容をよく見てますと、実際には授業評価は２つに分けて考えなければならないということが分かりました。

「フィードバック」と「査定」

２つというのは、まずは学生からのフィードバックという部分ですね。その学生からいろいろな意見を聞いたり、学生からいろいろな要望を聞いたり、それを基に授業を改善していく、そういう意味での授業評価です。

もう一つの方は、ここでは評価という言葉が重なってしまうので、評価とは別の言葉を使って「査定」という言葉を選びました。ニュアンス的には査定と評価は微妙に違いまして、それぞれ厳密には意味があるのですが、ここではあえて「評価」と区別するためだけに、査定という言葉を使いました。そもそも授業がきちんとできているのか、を学生から評価、そして査定してもらう。その２つの側面が少なくともあるんだろうなと考えられました。

まずフィードバックに関して、75％の先生が「授業評価をした方がいい」というような肯定的な意見だったのですが、自由記述で書かれている先生方のご意見というのは、査定のことではなくてフィードバックのことについてでした。つまり、「フィードバックだったらオーケー」、「フィードバックはむしろやるべき」だということです。「やるべきではない」という意見ももちろんありましたけれども、その意見の中でもフィードバックに関しては、「全体でやるんじゃなくて自分でやればいい」ということ。つまり、フィードバックに関しては多くの先生は「やるべき」か、「もしくはやった方がいい」というご意見が多かったということです。その理由としては、「適切な対応がこのことでできる」とか、「授業改善につながる」とか、「授業運営向上につながる」とか、「学生もより満足できるだろう」とか、そういったご意見がありました。

それに対して査定・アセスメントという観点から見ますと、実は授業評価についての否定意見というのは、「査定がそもそもよくない」というのが主たる理由でした。学生が評価するということには非常に大きな問題があって、例えば、「ほとんど普段授業に出てこない学生がたまたまその日に来て、勝手な意見を述べている」とか、「全然やる気もない学生が、単純に単位を下さい」など、そういった観点からしか先生を見ていない。最後に書いていますが、そうすると「単位取得の難易度にその評価が左右されてしまって、学生が評価する授業というのは、単位取得が楽な授業ほど評価されてしまう。これは非常に問題なのではないか」というような意見がありました。

このように、結局「フィードバックはいいけれども査定はよくない」というのが多くの先生方のご意見で、これがほとんど大多数の意見だと言えると思います。従って、今後授業評価という問題を考える際には、２つに分けて考えるべきであって、授業評価のことを議論するときには、どちらの内容について議論しているのかを明確にしておかないと、論点がずれてしまったり、ぼやけてしまったりしてしまうのではないかなと思われます。

授業評価の必要性

次に「学部を統一した授業評価が必要かどうか」ということです。この結果は非常に興味深かったのですが、ほとんど半々です。「やるべきだ」、もしくは「やった方

がいい」という先生がほぼ半分で、「やるべきでない」、「なるべくならやめた方がいい」というのも半分。もう真っ二つに分かれています。

肯定派は、「すでに行っている」というSFCの先生がやはり多いのですが、中にもいろいろな意見がありました。まとめると特に顕著なのが、「全体でやっていかなければ、その学部の中の問題点が浮かび上がってこないから全体でやるべきだ」というもの。また、ちょっと消極的な意見としては、「やっていないのは慶應だけじゃないか」、「ほかではやっているんだからやるべきじゃないか」などといった意見もありました。

否定派に関しては、一番多いのは、「ナンセンスだ」という意見でした。次が「無意味だ」、「むだだ」ということで、この3つがほとんどでした。残念ながら理由が書いてないんです（笑）。「無理」、「むだ」、「無意味でナンセンス」というようなことが並んでいまして、ただ、「どうして無意味だと思うのか」、「どうしてむだだと思うのか」、そこまで踏み込んだ意見があまり見られませんでした。ただ、「例えば語学を教えている先生とゼミを持っている先生では、当然違う教え方をしているし、その評価の在り方も違うはずだから、それを一緒にやるのはおかしいんじゃないか」という多様性を指摘する意見もありました。

ただ、私が見ている中で個人的に「なるほどな」と思った意見があったので紹介したいと思います。実際にこの作業を行う中で、私自身の考えを変えた意見です。実は私はもともと授業評価、学部統一の評価に関しては、「それほど必要ないんじゃないか」と考えていました。

木島　伸彦　氏

例えば、「相互比較が可能になるので統一した方がいい」あるいは「個別でやった方がいい」という先生ももちろんいらっしゃるんですけれども、それをある程度全体でやらなければ、自分に対する学生のとらえ方がどうなのかということが、実は分からないわけです。ですから、ある程度の相対的に見るということも必要かもしれない。

さらに、特にこれは別の大きな問題につながっていきますが、「あまりにひどい講義をする先生がいるじゃないか」と聞かれたことがありますよね（笑）。同意を求めるのもなんですが（笑）。私は個人的にいくつか「えっ」というような授業をしている先生の話を聞いて、「それはちょっとまずいんじゃないか」、そして「これはやはりある程度把握しておくべきではないか」と思ったことがあります。把握した後どうするかというのは、また別の大きな問題になるので、一言でいえば不適格教員の問題になるのですが、やはりこれは学生は分かっているわけですね。学生は分かっていて、大いなる不満を持っている。それに対して我々がまったく知らない、野放しでいいのかということを考えると、「やった方がいいのかな」と考え方が変わりました。

４つの質問項目

これはまったく私案なので、この委員会の案ではないのですが、「このぐらいだったら聞けるんじゃないか」ということで４つだけ選びました。

一つ目は難易度です。この授業が難しかったかどうかということに関しては学生に聞けると思います。これはどのような授業形態であれ、どのような内容を教えているにしてもそれは聞けると思います。それから分量、つまり授業内容が多かったのか、少なかったのか、あるいは適切だったのか、そういったことも聞けると思います。それから教員の熱意、教員に熱意があると思えたか。これも学生の主観になりますけれども、これも聞けるでしょう。あと教員の説明が分かりやすかったのか、分かりにくかったのか。この４点に関しては聞いてもいいのかと思います。

特に3、4番目ですね。熱意とか説明の分かりやすさが極めて低い点数を取っている先生に関しては、ある程度把握しておく方がいいのかもしれない。ただ、誰が把握するのか、把握した後どうするのかというのは、また別の大きな問題だと思います。

総合的評価というのもあってもいいかもしれませんが、これはまさしく学生側の単位の取得難易度、要するに取りやすさによって大きく変わってくることなので、これは逆に聞かなくてもいいかと思います。以上、私の勝手な私案なのですが、この私案を提案して終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

日吉カリキュラム検討委員会の中・長期の展望ほか

石井明　経済学部の石井です。まず私の役割を申し上げます。私は日吉カリキュラム検討委員会のメンバーではなく、そこの諮問組織的な部会、日吉カリキュラム検討委員会の中長期検討ワーキンググループの一員です。以前の基盤研究報告書の話が出ましたが、そこにある提言14から19あたりのところを執筆したのは私です。そういうこともあって、これからのカリキュラム検討委員会そのものがどういう役割を持つべきなのかというようなことを、ご紹介したいと思います。

日吉カリキュラム検討委員会の役割

まず日吉カリキュラム検討委員会の現在の位置付けを見ていきたいと思います。去年立ち上がったのですが、位置付けとしては、まず一番上に大学評議会があり、その下に学部共通カリキュラム委員会があります。そしてその下に、日吉カリキュラム検討委員会が置かれました。

メンバーとしては、日吉7学部の日吉主任、学習指導主任と、それから日吉の理工学や人文の自然科学といった部門の主査の方々が入っていらっしゃいます。そのほかにも特別に選ばれているような方も入っているという状況です。いわゆる、日吉のことを全体的に見通して把握できる方々がメンバーであるという形になっています。

実際にこのような形の委員会というのはこれまでなかったのですが、それが立ち上がったというのは大きな節目になったということは間違いないと思います。そこでいったい何をするべきなのかというのが大きな問題であります。色々な役割があると思いますが、特に重要なのは、各学部によって設置されている日吉開講の授業について、共通化を認定するということです。

ある意味日吉カリキュラム検討委員会に権限が与えられたことは一つの大きな動きです。その権限は、各学部が授業を設置するべきかするべきでないかなどといったことに踏み込むことは一切できません。ただ、各学部が設置する授業が、日吉の全体の授業として開講すべきかどうかを判定するという機能を持ったということはかなり大きな変化です。ただし、その機能を持たせたのはいいとして、それをいったいどうやって運用するのかがまだほとんど決まっていない状態で1年過ぎました。このこともあり、この中長期ワーキンググループでは、そのプロセスを考えようということが大きな目的となります。

これまでの授業設置の在り方は、基本的に各学部が次年度の授業を自分の学部の中で決めて、学習指導連絡会議という場で共通化の確認をするというものでした。ただし実態としては、昔の学事センターの担当者レベルで事務確認をするというようなものであり、それ以上ではなかったと個人的には認識しています。実際にその事務レベルでの話し合いの結果、共通化が「だめだ」と言われたようなことは、少なくとも自分の所属する学部の中ではなかったと思っています。事務レベルで共通化の認識が行われた後に、各学部に日吉の授業の一覧が、年度の終わりの方の学部会議において、他学部設置の授業を併設するということが出され、それを認める、というのがこれまでの習慣であったと思います。

このプロセスにある程度問題点があるのではないかという認識の下、まず設置学部が異なると、各授業の間の相互連絡の欠落が出てきます。そしてその結果どのようなことが起きているのか、というのを簡単にですがまとめてみます。

まず各科目の将来的な展望の検討の場の不足、つまり学部単位で物を考えることはできますが、日吉全体としてある一定の科目がどのように今後の授業を展開したいのか、というような話の場がないということが大きな問題です。

それによって何が起きるのかというと、例えば過度な授業の重複です。似たような名前の科目がたくさん違う学部から出てきます。それが悪い方向に進んでいくと、設置コマ数の増大につながります。現在700コマぐらいの共通科目がありますが、ここ数年で6～7%の増加が見られるという結果も出ています。建物の物理的なリミットもありますし、「このまま放っておいていいのか」ということになってしまいます。

別の例として、非効率的な人的リソースの活用を挙げ

ることができます。我々は、研究や教育などやることがたくさんあるにもかかわらず、むだを多く重ねてしまうと、本来やれることがやれなくなってしまうという状況が出てきてしまいます。ここをうまく、「ここにはこういう人がいるからこういうことをやろう」といった話し合いの場を持つことで、我々の持っているリソースを有効に活用できるのではないかと考えます。

では、それに対してこの検討委員会で、「現状の改善を行うにはどうしたらいいのか」を考えていたのですが、まず最初にまとめたのは日吉共通科目の理念の設定です。カリキュラム検討委員会が共通科目として認定するかどうかの判断基準というのがないと困ります。単に履修者が多い少ないということではなく、やはり日吉共通科目として何を目指しているのか、ということが問題です。そして、その目指している方向に各授業が合致しているかどうかを判断基準にしなければいけないということで、我々はまずこの理念を作りました。

一応ここで読んでみます。「慶應義塾大学キャンパスの共通科目は、未来社会の先導者たるにふさわしい行動力と思考力を養うための、幅広い生きた教養を慶應義塾大学学生の身に付けさせることを目的とする。同科目は大学１～２年生を主たる対象とし、多様な学びの形態を持つ。そこは他者と自己の相互に対する洞察を深め、社会と人生についての成熟した思考をはぐくみ、それらに基づいた活力あふれる実践力を磨く場となる。そのため、同科目は高度な知識と分析力を学生に獲得させ、それと連動すべき想像力、協働力、表現力、発信力を併せて育成することを目指す」とあります。これは実際に学部共通カリキュラム委員会でも承認され、評議会でも承認されています。

カリキュラム検討部会の発足

まずこの理念を設定して、「では、実際にその理念に合わせて、どういうことをやっていこうか」ということを考えました。まず日吉設置の授業を大きなグループに分け、それぞれのグループの授業を担当する方々を中心としたカリキュラムの検討会（グループ）を作りました。

その検討会は具体的に何をするのかについては、また後でお話しします。いずれにしろ、その関連科目あるいは特定のグループに分けていって、そこで実際に授業を受け持っている先生たちに入っていただくというのはもちろん、将来的にそこで授業を展開したいという方々や、授業は持っていないが、そういった分野の授業に興味を持っているという方に入っていただくなど、そこはオープンな話し合いの場になるべきだと考えています。もちろんそこには学部の壁はなく、どなたでも入れるような形を目指しています。

石井　明　氏

そういった人たちが集まることによって、自分たちの教育目標を考え、そしてどのような授業を展開すべきかということを、みんなと一緒になって話し合っていただければと思っています。

実際に４つのパイロットケースをつくり上げ、少しずつ動き始めています。芸術、文学、言語学、そして自然科学です。自然科学の分野はもともとまとまりがあるので、パイロットケースと呼ぶよりは初めから話し合いの場が成り立っているとも言えるかもしれません。あと体育研究所も同様に、「話が進みやすいのかな」と思っています。

では、次に「検討グループはいったい何をやるのか」ですが、まずグループとしての教育目標を設置し、次年度授業の設置コマ数と授業の内容を、新規、継続を問わずに日吉カリキュラム検討委員会に提案するということです。おそらく、秋の早い時期に、各学部で授業の設置が検討されると思いますが、通常だと科目のコマ数を設置することが主で、授業の内容については必ずしもみんなで議論することはないように思われます。場合によっ

ては、講義要綱の原稿で初めてその授業の内容が分かる、もしくは講義要綱が発行された時点で初めてほかの人の授業の内容が分かるというようなことも、多々あるのではないかと思います。

ここでの提案としては、少なくとも来年度の授業の内容まで踏み込んで見てもらう。つまり、教育目標を設定して、どんな授業をやりたいかという話をする場合に、コマ数だけではどうしても内容が見えてこないので、授業内容をみんなで相談することによって、それぞれの授業が自分たちの教育目標に合致しているかどうかを考えてもらいたいということです。それを作った上で、日吉カリキュラム検討委員会が「共通化するべきかどうか」を判断するというところまで考えています。つまり、各グループが出す資料に基づいて共通化を検討し、認定を行う。それが理想の形ではないかと考えています。

現在少なくとも2つのグループからすでに教育目標を設定してもらっています。まず芸術グループからは、「情操的鑑賞教育からさらに一歩進み、学術的方法論を用いて芸術的手法を考える視点を養う。そのために学生の資質、素養を考慮した多角的な授業を展開する。これによって芸術を通じた複眼的視点を持った人材を養成することを目的とする」という目標を出してもらっています。

そして言語グループからは、2011年度にすでに開講している授業について、「来年度はこうなるかどうかは分からないが、少なくとも今年度はこうしたい」ということで発表されたものがあります。それを読んでみます。「本科目は体系立った言語知識を分かりやすく提供することはもちろんのこと、日常使われる母語を客観的に意識させ、言語が有する多様な本性を、人間のさまざまな能力や活動と関連付けて明らかにし、自ら理解させるものである。授業を通じて柔軟かつ論理的な思考力と深い洞察力、さらには豊かなコミュニケーションの力を身に付けさせ、幅広い教養の基盤となる言語の力を涵養することを目指す」というものです。

こういったものに基づいて、各授業の位置付けを少し皆さんで相談していただきたいと思います。今後どういう流れで次年度の授業の設置が行われるかということを以下にまとめます。まず、カリキュラム検討部会が次年度の授業の提案を行い、それを基に各学部がそれぞれの学部設置分の認証を行います。タイミングとしては、それと同時もしくは後にカリキュラム検討委員会でその設置が決まった科目について「共通化するかどうか」を考えます。そして、ここで共通化の認定が行われれば、次に各学部に下ろされ、そこで初めて共通科目の併設が行われます。そういった流れを目指しています。

つまり、実際に授業を立ち上げて設置するのは各学部ですが、その前の段階で、所属学部は関係なしにその科目に関連している人たちが集まって、「自分たちはこういう授業を展開したいんだ」、「こういう目標を持って、こういうゴールを持ちたいんだ」ということを話し合っていただくことが、将来の我々にとってもっとも理想な形なのではないかと考えています。

魅力的な授業のための環境創りを

最後に簡単にまとめてみます。基本的に日吉における限られた人的リソースを最大に活用していくのが、やはり我々慶應義塾としての、グローバル化の中で生き抜いていく、もっとも重要な要素の一つではないかと思います。そのために展望性のあるカリキュラム展開、つまり、お互いに話し合うことで、もしかしたら新しい授業のあり方のアイデアなど出てくる可能性もあるのではないかと思います。

また、学生の視点からは、共通科目としての各授業の位置付けの明確化を行うことによって、学生は授業の履修計画を容易に、かつ建設的に立てることができます。例えば、各授業のレベルやタイプを示すことによって、学生は単位が取りやすい履修科目だけを取ってくるとか、または保険をたくさん掛けてくるといった状況がなくなるのではないかと思います。理想的には、各学生が「こういうものを勉強したいので、こういう授業を取りたいんだ」という思いを持ってくれることを期待できるのではないかと思っています。

現状では、各先生がそれぞれの工夫をなさって授業を展開しています。でも、やはり横のつながりやまとまりがない場合、学生から見ても、「あの授業は面白いかもしれないけど、あの授業を取った、その次は何があるのか」ということが見えてきません。それはある意味で、我々のリソースのむだでもあるかもしれません。

いずれにしろ、今まで我々がやってきたことを否定するのではなくて、より有効的に活用して行こうということです。「コマ数が増えているから、とにかく減らさなくてはいけないんだ」など、ちょっとネガティブな考え

方が出てしまうことが多いのですが、そうではなく、むしろ我々がやっていることの正当性を、こういった形でもっとアピールできるんではないか、というのが我々が考えていることです。「我々はこういうことをやっているんだから、もっと学生に分かってもらいたい。そして大学の外に向かっても、こういう授業を展開しているんだから慶應は魅力的なんだ」ということをより言いやすいような環境を創ることができるのではないかと感じています。

実際にどういう形で運用されるかは、まだまだ実験的な要素が多く、はっきりしたことは言えませんが、少なくとも今日この場にいらっしゃる皆さんの意見を伺うことで、我々もまた違う見方もできるのではないかと思っています。

最後に、今日は私がお話をいたしましたが、ワーキンググループの中で必ずしも統一的な意見ではありません。まださまざまな議論を行っているさなかなので、今日いらっしゃるメンバーの方々にも、後でいろいろお話を伺うことができればと思います。

佐藤　ありがとうございました。これでひとまず報告は終了となりますが、これまでの話をうけて金田一先生と長谷山先生からコメントをいただきたいと思います。

金田一真澄　日吉カリキュラム検討委員会委員長の金田一です。

詳しい話が石井さんの方からありましたので、私はそれ以外のところをフォローしてみたいと思います。まず、この日吉カリキュラム検討委員会発足のきっかけとなったのは、やはり日吉キャンパスの特殊性がまずあるかと思います。日吉キャンパスは7学部を擁する多様性に富んだところですが、それを裏返して言えば非常にバラバラな感じのキャンパスです。そして1、2年生しかいないキャンパスであることも大事なポイントです。また、学部長のいないキャンパスということでさらにまとまりのない、良い面も悪い面もあるキャンパスであると思います。こういう物理的条件の下で教育をどうしていくのかというときに、まさにこの日吉カリキュラム検討委員会が生まれました。

流れとしては、先ほど佐藤先生の方からありましたように、教養研究センターにまずその道筋をつくっていた

金田一　真澄　氏

だいたのだと思います。ここにいらっしゃる伊藤行雄先生はじめ、多くの教養研究センターの先生方が道を切り拓いたと考えてよいかと思います。そしてその次に、私の前任者と、そのまた前任者の朝吹先生、関根先生がそこにレールを敷いて、その上を私は電車に乗って走っているという感じです。その電車の牽引役をやってくれたのが、日吉カリ研の下にある中長期のワーキンググループというところで、石井先生をはじめ、ここにいらっしゃる齋藤先生、種村先生、青木先生その他の方々、こういった方々に引っ張っていただきました。石井先生には私もよく尻をひっぱたかれながら、「もっと理想を追い求めよう」ということを言われてきました。さらに後ろから私たちを押してくださったのが、ここにいらっしゃる長谷山理事や各学部長による「学部共通カリキュラム委員会」という親委員会です。その後ろ盾をもって私が前へ進んでいるという状況に今あるわけです。まだ始まってからそれほど経っていませんので、「これから私たちはどう進めたらいいのか」ということで、具体的には先ほど石井先生からご説明があったとおりでございます。

私の方からは具体的な話ではなく、もう少し全体的な話をしますと、今日配布されましたアンケート結果というものがございます。これの8頁をご覧ください。この頁に問46、47がございます。この問の結果をみますと、「日吉カリキュラム検討委員会を知らない」という人が結構います。

先ほど佐藤先生の方から日吉の先生は割と知っていらっしゃるというようなフォローがありましたけれども、知らない人が多いということ、これが大問題です。まずは存在感を示すことが必要かと思います。ただ、苦言を呈するならば、問46の2行目に「日吉共通カリキュラム検討委員会」とありますが、「共通」は要りません。日吉カリキュラム検討委員会です。それから問47には「学部共通カリキュラム検討委員会」とありますが、ここでは「検討」は要りません。「学部共通カリキュラム委員会」です。まあ、関係者でもこの程度の認識しかないということで（笑）、「いかにこれを知らしめるか」、そこにまずポイントを置かなければいけないと思っています。

それ以外に、先ほど石井先生の方からかなり理想的なところまで踏み込んで説明していただきましたけれども、私も理想を言えば、「ここで認定される共通科目というものがある程度ステータスを持った科目であってほしい」という気が致します。ステータスを持った科目というのはつまり、「それなりの人が担当し、それなりの厳しい条件の下でこの600ほどの共通科目を立ち上げて、それを担当する方はそれなりのプライドを持ってやっている」という共通認識を皆がもっているということです。また、できたら250人ほどいらっしゃるこの日吉の先生方全員が一つはぜひ担当するような形にして、それからみなさんの考えがまとまっていくような情報交換の場が生まれることが必要だと思います。

それから最後に一つだけ、教養教育の今後ということを考えた時に、やはり今時代はグローバル化に向かい、それからメディアが加速度的に発展していく、そうした状況にたえうる教養教育とは何なのかということをこれからも考えていく必要があるのではないかと思います。先ほど石井先生が提示してくださった理念がありますが、あの理念はこれまで教養研究センターが蓄積してきた成果が出ていると思います。あれはあれでとても素晴らしいものと思います。ですが、それを少しずつ2年か3年に一回ずつ見直し、時代に合わせていこうという考えも出ております。ぜひそういうときは皆さんの方から日吉の教養教育とはこうあるべきだ、1、2年生への教養教育はこうあるべきだ、というご意見をいただきながら進めさせていければと思っております。

以上簡単ですが、私の方からのお話とさせていただきます。どうもありがとうございます。

佐藤　金田一先生、ありがとうございました。それでは、次に長谷山先生からもお願いいたします。

長谷山彰　長谷山でございます。よろしくお願いいたします。

今日の御報告にはいくつかの柱があったと思いますが、大きい柱は、授業評価の問題をどう考えるかということと、日吉の共通カリキュラムをどう考えていくかということ、組織の立ち上げから一定の年数が過ぎて、今後どういう方向に行くべきかということだったと思います。

授業評価の問題については、アンケートの結果を私も興味深く拝見しました。古くて新しい問題や今までに気が付かなかった問題などがいろいろ出ていると思います。ただ、「授業評価というものがいわゆる教員評価・査定なのか」、「授業内容改善のためのフィードバックなのか」という点は、以前から非常に厳しい議論があったところです。授業評価への反対論の代表的なものは、「大学の教員というのは評価されるべきものではない、その評価というようなものは、学問の自由の侵害だ」ということをエルトンが唱えて以来、一貫していると思います。

しかし、今の日本の流れでいうと、「学士課程の教育をどうするか」とか、「学習到達度」や「どういう目標を持って大学が教育しているか」という課題は重要で、やはり学生へのフィードバックを含む授業評価という考えは必要になろうかと思います。そのときに、これまでにあまり考えられなかったのは、授業そのものの形態がだんだん変わってきていて、講義であれ演習であれ、双方向的な授業というものが求められるようになってきたということです。ハーバード大学「白熱教室」のような言葉のやりとりゲームみたいなタイプの双方向授業というのは実は私はあまり好きではないのですけれど、しかし内容の濃い双方向的な授業が求められているということは言えます。知識習得型の学習で足りた時代から、専門的な知識を核にした教養を備え、創造力、判断力、発信力のある学生の育成が求められる段階への移行の中では、どうしても双方向的な授業というものに移っていかざるを得ない。

そうしますと授業評価についても、学生が主体的に評価に参加してくることが非常に重要です。先ほど「総合評価のところをどうするかは今日は措いておきます」と

石井先生のお話がありましたけれども、しかし本来「学生自身がどういうふうに学びにかかわっているか」や「学生自身がどう自己の学習を評価するか」、そういった要素を入れていかないと、もう一段レベルアップした形の授業評価が大学で普及していくことは難しいんじゃないかと感じます。

もう一つはやはり、何といっても「項目」ですね。先ほど大変工夫された評価項目を示していただきましたけれども、項目は大事です。項目の立てかたは、教育目標、理念、どういう人材像を持って、どういう授業を展開するかということが根底にあって、そこから項目が出てくるべきだと思います。その辺の工夫がさらに必要なのかなという感じがいたしました。

さらにもう一つ、日吉カリキュラム検討委員会につきましても、やはり重要なのは根本理念です。慶應義塾としての教育理念を設定する、どこに目標を定めるかということが重要です。授業評価にしても、この共通カリキュラム委員会の問題にしても、教育理念や教育目標と連動しているはずで、そして最終的には何が学生のためになるのかですね。やっぱり学生が大学の最大人口の住人ですから、その視点でもって、教育を考えていくという姿勢が、全教員に要求されてくるだろうと感じています。

以前呼んでいただいた2009年11月の「4年間を見通した教養教育」というシンポジウムでも似たようなことを申し上げたと思います。

長谷山　彰　氏

授業評価にしても、それを受けて改善された教育が、アンケートに答えた学生自身にどうフィードバックするかということが非常に大切なので、学生から受けた要望などを直接その学生に返せないところが、現在の成績評価や授業評価の最大の問題点だと思っています。ですから、「改善に資するようなことを教えてくれた学生自身にどういうふうに返していくか、そしてまた、学生と一緒にどう授業をつくり上げていくかということが課題」という感じがしますね。

いずれにしても、前回のときもグローバル化時代で大きく時代が変わっている中で、どう教養教育を考えるかという話が出ましたが、教養研究センターは、まさにそのことを専門にする研究部門ですので、客観的な研究成果を提供することで、それを受けた学部、研究科が自分たちの教育研究の方向を考えていく、教養研究センターはよきアドバイザーとして進むべき方向を指し示す気概を持っていただければと思います。

最後にこれまでやってこられた個々のテーマを結合した教育の全体像が大事で、例えば授業評価は授業評価だけでは成り立たず、成績評価と連動しますし、その2つはまた必ずシラバスと連動します。そして、これらはさらにFDと連動してくるので、全てをひっくるめて教員も学生もお互い主体的に、義塾の教育をどういうふうに向上させていくかということで協力できていくような姿、それを積極的に研究成果として今後もお示しいただければ、大変ありがたく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤　ありがとうございました。確かにこのシンポジウムはこれまでも似たようなテーマで、手を替え品を替えやっていますが、話していることは、ほとんどぐるぐる堂々巡りをしている感がないでもないのです。とは言え、このシンポジウムは伊藤行雄先生が長年座長をなさっていて、ずっと私は伊藤先生の伴走をさせていただきました。伊藤先生はこの研究期にたまたま退職の時期と重なってしまったので、私が最後ちょっと引き継いで、この研究をまとめているような段階です。

ただ、前回のときは進んでいないことをそのままぶちまけたような気がするのですが、今回こうやって見てみると、学事センターのシラバスの電子化とか、それによっていろいろな授業が、ほかの教員の授業がばっと見られ

るようになったというのは、これも結構大きいことですし、それから評議会とつながった検討委員会ができていることは大きいです。いろいろな他大学の事例なんかを研究し紹介して、人の集まらないシンポジウムを開くという非常にむなしい作業をずっと続けてはいるのですけれども、ポジティブに見ないと先に進めないんですけれども、そういうところは見えている。

伊藤先生が非常に忍耐強く人を説得して、人を集めるということをやってくださった成果が少しずつ芽吹いています。慶應義塾って非常に大きい組織ですので、何かを変えるといっても変わらないということも、重々承知しているんですけれども、そういう、授業評価、成績評価、シラバス、FDというのがつながっているということです。そのスパイラルの1周もまだしていないと思いますが、1周スパイラルを向上させたら、またもう1回スパイラルを回していくというような、そういうメカニズムがうまく学部間の間で働けばいいなと、私は思っています。

全体的な意見があればと思いますがいかがでしょうか。青木先生、口火を切っていただけませんか？

青木健一郎　授業評価の話が出ていたので、これについて一言いおうと思います。

まず、このアンケート結果全体に関しては大変興味深いと思います。しかし、授業評価を75％の教員が肯定的に見ているというアンケート結果についてはサンプリングバイアスが大きいと思います。例えば、こういったアンケートに答えてくれる人は、アンケートに関して肯定的な考え方を持っている人が多い可能性が大きく、ほかの部分も含めて、気を付けて見ないと誤解を生じる可能性はあるとは思いました。

授業評価は、個人的には以前より無記名で行っていますが、かなり手間がかかります。学生部で集計してくれるのであれば、それは助かるので、私自身はありがたいです。アンケート項目の中では、「熱意」というのは漠然としていてなかなか評価が難しいと思います。例えば、「教員が質問にしっかりと答えるか」といった項目は私は入れていますが、熱意というのは結構オリジナルだと私は感じました。

また、アンケートで「査定」をするのは良くないという指摘があるという話がありました。それはよく分かります。アンケートは単に良し悪しの判断にはあまり適さないと思います。例えば、学生が授業を受けた時点で良いと思った授業も、必ずしも後に良いと思うかは分かりません。次の年になってみて、「あの授業は分かりやすいと思ったけれども、それを元にさらに学習しようとしたら全然内容が足りなかったことが分かった」ということもあり得ます。学生が単純にイエス、ノーと評価するのではなく、具体的に参考になる情報が伴う「査定」であればそれは良いことかと私は思います。

学生が行っている授業アンケートについて他の教員も問題視していたのは、会員制のWebサイトがあり、試験問題などもそのままアップロードされているらしいことです。厳密なことを言えば著作権の問題もあるわけですが、それ以外にもそのサイト自体が商業的な運営をしていて、これを問題視している方もいることを付け加えておきます。

佐藤　サンプリングバイアスが大きいということは、もうこれは重々承知しています。それから会員制のサイトについては、ほとんど知らない方が多いというのが実情のようです。ただ、あれはちょっと本当に問題ですね。ほかにいかがでしょうか。

種村和史　商学部の種村です。授業評価のことについて、青木先生のコメントに関連して質問します。

木島先生のお話の中でフィードバックと査定をはっきり分けるべきだということがありまして、確かに「ああ、そうだな」と思ったんですけれども、木島先生の示した項目というのも、いってみればこれはフィードバックとも取れるし、査定とも取れますよね。そこの違いをいかに明確化するかというと、おそらくその項目の内容うんぬんというよりは、授業評価の結果をどのように使うか、どのようにその後の作業につなげていくかということを明確化することが大切なのではないかと思います。そのあたりのところで何かお知恵みたいなものがおありでしたら教えてください。

木島　これは完全に私の意見なんですけれども、フィードバックというのは基本的に自由記述で返してもらうようなものであって、評定するということはやっぱり査定の方に入るのかなと思うんです。

ただ、先生がおっしゃる通り、その使い方によってはその査定をフィードバック的に使うことは可能だと思います。これも私の考えですけど、基本的にフィードバックというのはあくまでも学生側が自由に、要望なり何なりを書くものと考えていいのではないかと思います。厳密に言うと、確かにどちらでも使えてしまうので曖昧に感じられるかと思いますが、私の基本的な考え方は非常に単純で深いことは考えていないんですけど。

種村　ということは、木島先生の示した項目というのも、基本的には査定という位置付けということですね。

木島　歴史的に見れば、授業評価は文字通り海外ではその査定が昇給とか昇進に結び付く、あるいは報酬に結び付くという形で使われていた、「査定」という言葉を使ったときに私がイメージしていたのはそういうことです。

日本では今のところ、国レベルにおいても、大学レベルでも、そういう意味の査定に使うという考えは持っていないので、逆に言えばこれだけやっているのに、査定だけして何で昇給はないんだという教授も、もしかしたらいるかもしれない。でもそういうものじゃないという共通認識の下で、日本では授業評価がまず行われているということです。

ただし、もちろん授業評価は、教員の評価を学部が行うための一つの手段だという発想もあると思いますが、少なくとも慶應義塾ではそういう考え方は取っていません。とすれば、やはりこれは個々の授業の改善、あるいは学部や大学教育全体の改善という、そういった仕組みの中の一つとしてとらえていくべきなのではないかと思います。そういう大きなところの前提はやっぱり押さえておいた方がいいと思います。

荒金直人　理工学部の荒金です。理工学部ではFD授業アンケートというのをやっていて、学科によって多少使い方が違うんですが、フィードバックとして使うか査定として使うかという面では、教員だけがアンケートの結果を見るというのがフィードバックの基本的な形ですね。他人にも見せるとなると、査定の始まりになるので、理工学部の場合はどちらも選べるようになっていて、見せたい人はオープンにするし、学生からの批判なんかをほかの人に見られたくない人は、自分のところでとどめておくということができるようにしています。そういう形で、基本フィードバックと考えるのであれば、公開せずにやるというやり方もあるかなと思います。

佐藤　理工学部のやり方というのは知らなかったんですけど、それをシステム化しているんですか。

荒金　そうです。

佐藤　次に近藤先生、お願いします。

近藤明彦　体育研究所の近藤です。授業アンケートに関しては、教養研究センターでもFDワークショップやシンポジウムでもずいぶん話題となっていました。石井先生に演者をお願いしたこともあったかと思います。初任研修などでフィードバックを新人教員が得るということもお聞きしたかと思います。シニアの先生が「こういう課題についてはこういうふうにやった方がいいよ」という新人教員に対して教授法を教える場みたいな使い方もあって、それは非常に役に立つというお話を聞いた覚えがあります。

実際に、国立の各大学にある高等教育研究センターなどでは、いわゆる初任の先生方を集めて、アンケート等を使って先生方の資質を高めるということまでしていると思います。しかし、そこまでいく必要があるのかなと、今日お話を聞いていて思いました。

体育研究所でも、授業アンケートを十数年間やっていて、もう査定みたいなことも平気です。「教員はこの授業のための準備をしっかりしてきましたか」とか、「教え方はちゃんとしていましたか」といった、そういう厳しい質問項目もあります。そして、それに対していろいろな意見も記述してもらっています。

でも、それをやりっ放しにしておくと何も起こらないんですよね。Plan, Do, Checkまではいいのだけど、その後にどういうアクションを起こすか、「PDCAのAで何をするか」ということがないと、やはりアンケートに関しては意味がなくなってしまいます。

それが給与につながるというのはアメリカ的発想なのですけれども、お互いにオープンな感じでやっていれば、「少し良い授業の展開のために」というふうに考えられると思います。どうも日本人の先生方は、「あなたに私

の授業のことをどうのこうの言われたくないわよ」という、そういう感覚があるんじゃないのかと思います(笑)。

7～8年前に横山先生たちと一緒に公開授業をやっているとき、「私の授業をいつ見に来ても良いですよ」ということもやりましたが、ほとんど行く先生もいなかったし、来る先生もいなかった。本当はその辺がオープンになり活発になってくるのがいいと思いますが、なかなか難しいことかなと思いました。

佐藤　ありがとうございます。この問題は難しいですね。授業評価や成績評価など、そういったことも全部連動している問題なので、いろいろなご意見をお持ちの方はぜひここで出していただきたいと思います。

近藤　横山先生たちとソウル大学などに調査研究へ行ったときの経験なんですが、向こうはわりとデシジョンメーキングが早いです。学部大学など、新しい組織をつくって教養部門は全部そこで担当しています。それで意思決定や行動の統一ができていると思うんですね。

慶應の場合は、まず各学部があり、また部門の違いがあって、様々な事を決めるにはそれぞれの組織で意見統一を取っていかなきゃいけないということから、何かご機嫌伺いをする必要が有るような感じもあります。あまり早急に動かないのでいいのかもしれないけど、あるときは、やはり決断をするメカニズムをちゃんとつくらないと、大きなことは決断できないんじゃないかと思います。

日吉カリキュラム検討委員会はその第一歩だと思いますが、やはりそれも強い力、強い権限がそこに付与されないと、結局今までと同じになってしまいます。ですから、意志を持ってそういった機関に権限を与えることが、私はものごとを大きく動かすためには大事ではないかと思います。

佐藤　ちょっと微妙な話題が出てきました。例えば伊藤先生は長い経験で、慶應義塾のことをよくご存じだと思うのですが、いかがでしょうか。

伊藤行雄　今の近藤先生のお話はとても素晴らしいですね。1991年の設置基準の大綱化のあとに、国立大学をはじめとして多くの大学で専門課程と教養課程の区別を廃止する方向に動きました。教養科目や外国語教育がどうあるべきか、検討される前に大学の組織替えに急いだ大学もかなりありましたね。

ＳＦＣを別にすると、大綱化をまとめる中心的な存在であった石川塾長（当時）が既成の学部にどのように問題を投げかけるのか、各学部は疑心暗鬼であったことは事実だと思います。しかしながら石川先生は1992年１月に「大学教育問題検討委員会」という組織を作り、改革については各学部で自由に検討するように、という提案をされて、約１年かけて開催されたこの委員会で各学部の改革の動きを見るという姿勢を崩されませんでした。私もこの委員会に参加して、その当時の記録を読み返しても、各学部の新しい取り組みが報告されていた。そのことがよくわかります。ただ学部自治が尊重されたものの、学部間で話し合い、共通の改革を行うという意識はなかったように思います。各学部が独自の改革案が進み、共通のテーマは大学教育委員会でも評価問題などが検討されましたが、カリキュラムについては、学部共通で検討された記憶はあまりありません。一方、日吉では教養研究センターが発足する基盤となった、さまざまな一般教育についての検討委員会や研究、教育組織についての検討委員会が設置され、活発な議論が展開されてきたわけです。しかしカリキュラムの共通化の問題は教養研究センターが設置され、「基盤研究」でカリキュラム検討が行われるまでは、本格的に議論はされていませんでした。

昨年、「基盤研究」で議論を重ねてきた「日吉カリキュラム共通委員会」が、ようやく日吉主任会議（代表は朝吹先生）の素案として大学評議会に提出され、金田一先生が代表になられてから承認されるまで、かなりの時間を要したことも事実です。私自身は佐藤さんたちと６年間、カリキュラム研究を行ってきたわけですが、なかなか一般の教員には共通化問題は理解してもらえなかったと思います。

しかし、最近では「日吉カリキュラム検討委員会」も問題別にＷＧが設置されて、問題点が深く検討されていると理解しています。私としてはこうした動きを日吉だけでなく、三田も含めて、各学部に周知されるようになれば良いと思っています。それにはやはり重要なのは、日吉の総合教育科目は現在どのようなカリキュラムが必要とされているのか、という点です。この問題を考えるのがすべての出発点であることは間違いありません。今までのように責任の所在がわからないまま、カリキュラ

ムが決定されていく（これは「日吉カリキュラム検討委員会」が発足してのちに解消されたと思う）時代が長く続いていました。そのような無責任なカリキュラム決定が行われなくなっただけでも大きな進歩だと思います。ただこれからは新しいカリキュラムを学部からだけでなく、「日吉カリキュラム共通委員会」から各学部に提案していくという流れを作っていく必要がありますね。その意味でこの委員会の存在が、各学部に周知されることが重要です。今の段階でも日吉の教員のあいだでも十分に知られているとは思いません。私としては早い機会に、例えば、カリキュラムが文化知、社会知、科学知、複合知（石井さんが以前書かれていたように）に分類され、さらに科目のレベル分けが行われ、学生がいろいろなグループから選択して自分のカリキュラムを作っていくことができるような改革を行っていただければ、総合教育科目も３、４年での副専攻や論文コース、あるいはゼミ（教養系）などの基本コースになっていく。そうした改革をぜひ進めていただきたい。慶應は革新的に変化していく部分と、少しずつ改革していくプロセスと２つあると思います。ただそこには厳然と存在している学部があります。学部解体など騒がれた時代もありましたが、私はうまく共存していくのが慶應ではいちばん事を進めるのに大事なことと思います。

最後に一言、最近の学生部が作成される共通科目の一覧表などはとてもわかりやすくなってきてカリキュラム全体を見渡すには重要な資料となっていますね。学生部との協力体制がないところでカリキュラム改革は難しいでしょう。私はこうした改革を見届けないうちに退職してしまいましたが、日吉共通科目の改革がさらに前進することをいっそう期待しているところです。

佐藤　今日初めて来てくださった若い先生方もいらっしゃいますので、素朴な疑問やご意見なんかもぜひ挙げていただければと思うんですけど、いかがでしょうか。

山本晴道　日吉学生部、学事担当で法学部係をしております、山本と申します。個人的には授業評価の部分で、学生が書いてきた評価アンケートを読んでみたいと思いました。例えば、日吉の少人数教育セミナー、ああいった授業の学生が書いてくるアンケートというのは、ちょっと読んでみたいと思いました。

といいますのも、大教室の授業ですと、たまに出てきて「つまらなかった」というようないいかげんな回答をしてくるような子もいるかなと思いますが、少人数ですとやはり先生との距離も近いですし、すごい真剣に授業をすると思うので、その熱心な中で学生が感じたことを文章として、まあ、ちょっと距離が近過ぎる分、「あんまり変なこととか悪いことは書けないな」とか、そういうのもあるかもしれないんですけれども、でもやっぱりそこで出てくる一つ一つの回答はすごく面白そうだと思います。

ちょっと話がそれますけど、少人数セミナーはこのアンケート結果の中の「考える力」や「価値判断力」でも一番、「具体的な教養とはどのようなことですか」でも一番高かったですし、シラバスを読んでいても面白いと思う授業がすごく多くて、ここの部分もこれからどんどん強化していけたらいいのかなというのは、日々仕事をしている中で感じているところです。以上です。

佐藤　ありがとうございます。これについて何かコメントなさる方はいらっしゃいますか。

授業評価のアンケートは、人数が少ないと満足度が高くなるという傾向ははっきりしています。あと、慶應のレベルの学生だとあんまり変なことは書かない。ですからそんなに心配しなくてもいいかもしれません。よその大学ではいろいろなことが起きるらしいです。例えば、授業評価を基にして、何か先生を傷つけてしまったりとか。でも、慶應でも起きないことはないんでしょうけれども、わりとその心配は低いとは思います。私はもともと授業評価はもう大反対だったんですけど、何か、このアンケートを見ながらちょっと意見が変わってきた一人なんです。

あともう一つ、何かどうしてもというのがあればと思いますが。それでは、木俣先生、お願いします。

木俣章　法学部の木俣です。まず一つ、この「これでいいのか？　日吉のカリキュラム」という話が、今日はできたのかどうかということですね（笑）。どういうふうに思っていらっしゃるのか。

それから、科目数が増えていると石井先生はおっしゃったんですけれど、これはセミナーを入れて増えているということですか。

石井　そうだと思います。

木俣　セミナーは一斉に増えましたよね。ですから、これを総合教育科目、例えば検討の課題になっている、文学や歴史などがかなり増えたという考えではないということでよろしいんですか。

石井　必ずしもそうではありません。ただ、商学部がかなりの少人数セミナーというのを開講し始めたのが実は、それほど最近ではなくて、それは2005年です。つまり、あれからもう7年たっているという状況です。その時点からもうすでに、6～7%増えているということですので、少人数セミナーがたくさん生まれた時期から、さらにまた6～7%増えているという事情です。

木俣　しかし問題はその増えた内容ですよね。つまり、科目が新設されて増えたのか、それとも従来の文学だとか歴史がかなり増えているのか、ですね。その実態をはっきりさせないといけませんね。

石井　齋藤さんにかなり素晴らしいデータを作っていただいてこれを見ていますが、必ずしも増え続けているわけではないというのは分かっています。しかし、新設科目みたいなものが増えているというのは事実だとは思います。

ただ、誤解していただきたくないのは、科目数が増える、またはコマ数が増えるというのがいけないことではないということです。ただ、無造作に増えていくということはあまり良いことではなく、その増えていくという正当性を我々が示さない限り、「やはり何で増えているんだ」という批判の対象になってしまうところに大きな問題があります。我々が確固たる意思を持って、「これだけの授業をやりたいんだ」、「これは学生のためにもなるし、慶應のためなんだ」ということを言えれば、増えても一向に構わないのではないかとは思います。

木俣　ですからその新陳代謝といいますか、旧来からの科目が、数が20なら20のまま、時代の流れにもかかわらず続いているですとか、それから新しい新設科目があまり出てこない、あるいはたくさん出てきている、そういうところは非常に重要じゃないかと思います。

石井　まさにその通りだと思います。

木俣　増えているという現象だけでなく、その移動の中身といいますか、その辺を詳しく分析していただいて、調整していただけるのがその検討委員会じゃないかと期待されると思います。

石井　そうですね。分析ももちろん大切だと思いますが、やはりその授業を担当している方々が、横のつながりを意識して自分たちを見つめ直し、今後どうしたいのかということを話し合う、そうすると、必然的にいいものになっていくとは思っています。

今おっしゃっていただいたように、ただ惰性で授業をやっているというようなケースもあったりします。それから場合によっては、専任教員が退職なさった後に、そのコマは必要だろうということで非常勤の方を埋めていくということもあります。でも、それは単に穴を埋めていくということであって、本当にその授業は必要なのかということが理解されたうえで、非常勤講師で穴埋めしているとは限らないようなケースがあったりします。

ですから、自分たちの間で、何をやりたいのかというのを確認しない限りは、そういった惰性のようなことも起きますし、むだも多くなってきます。または、本来やれることがやれないというような状況も生まれてくるかもしれない。そういったことをできるだけ防いで、我々の間で理想的な授業の展開というのを求めていきましょう、ということです。

佐藤　ありがとうございました。先へ進んでいるということを見据えて、いろいろな話し合いでもって教員同士の連携を高めていくのは、教養研究センターの重要な機能です。また、設立以来そのようにやってきましたので、こうした機会を持ち、場合によっては学部に提案する、義塾に提案する、ディスカッションを深めていく、場合によっては拒否する、などいろいろなことがあるのが、やはり大学としての正しい姿だと私は思います。今後もこういうディスカッションを続けていきたいと思います。

伊藤　細かいことを一つだけ。講義要綱のなかの各授業の評価方法は、ネット上で学生が読むことができるわけですね。今は学生部が徹底的にチェックされていることと思いますが、もし必須事項の欄に空欄がある場合、その教員の講義要綱は掲載しない、という厳しさで、対処してほしいですね。「授業に対する貢献度とか出欠のこと」というのがあります。私も書きますが、せめて５つぐらい採点の基準は書くべきだと思っています。

佐藤　あれは確かに、「平常点」とか、「授業の貢献度による」という記述が多いです。それで授業の成績評価基準が明らかになっているとは言い難いでしょう。しかしやはりそれは、同一科目での意思疎通がある程度できないと不可能というのが、2009年のときに村山さんたちが作った一つの結論です。ですからやはりそのことを徹底的に進めるには、日吉カリキュラム検討委員会が、そこまで機能するようになるということが必要だと思います。私はそのように思っています。本日は、どうもありがとうございました。

資料 1　2005-2006 年度基盤研究報告書での 28 の提言

第１章　提言

2005～2006年度
基盤研究報告書

本章では，まず本研究が結論として出してきた慶應義塾大学のカリキュラム運営に関わる諸提案を掲げる。その背景や理由の詳述，諸問題の検討は，第２章のそれぞれ対応箇所で行うこととする。これらの提言に共通する目標は，「現状の変革をめざして，実践可能な教育モデルを提示する」ということである。すなわち，現在あるリソースを利用し，現在の成功例を生かしながら，責任のある教育を実践するために，地道な努力を行えば現実的に実行可能な処方箋を示すことである。

○　達成
△　一部で達成
☆　現在進行中　　（2011年7月時点）

現状の変革をめざして，実践可能な教育モデルを提示する

■成績評価方法

△ 提言 1　どのような教科・科目でどのような評価方法が用いられているか，教員間で理解を深める。

提言 2　教員は成績評価の観点を必ず学生に公開し，学生に理解させる努力をする。

提言 3　同一科目・系統の教員間で，評価規準（criterion）の内容を検討し類似項目の整理・統合をはかることで共通認識を持つ。

提言 4　複数の評価項目についてはその重要度（評価比率）を明示する。

提言 5　成績評価基準（standard）に関する組織的な統一性を高めるとともに成績評価に関する責任を各教員任せにしない体制をつくる。

提言 6　成績評価制度を統括・支援する組織を教職員一体となって形成するとともに，それを中心に成績評価方法を含めたシラバスの公開方法を検討する。

△ 提言 7　成績評価に関する学生への情報開示について積極的に取り組む。

■セメスター制度

提言 8　秋学期の履修登録が可能なセメスター制度を実施する。

提言 9　授業をレベル分けし，授業の達成目標を明確化し，順次高いレベルに進むことを誘導するシステムを作る積み上げ型のセメスター制を作る。

■履修登録制度

提言 10　秋学期の履修登録を可能にする制度とシステムを整備する。

■講義要項（シラバス）

○ 提言 11　紙媒体の講義要項は最小限にし，数年かけて電子媒体のシラバス公表システムを開発する。

○ 提言 12　新システムは，教員のシラバス提出，とりまとめ，公表，訂正，時間割・教室公表などのプロセスを一元化した CMS（コンテンツ・マネージメント・システム）とする。

○ 提言 13　新システムは検索機能を充実させ，学生が得たいと思う情報を即座に得られるようにし，かつ各科目の実情にあったものとする。

■日吉設置学部共通科目の新しいあり方

☆提言 14　日吉設置学部共通科目（総合教育科目）の理念・目標の確立を行う。

☆提言 15　日吉設置学部共通科目（総合教育科目）に属するそれぞれの授業の位置づけ，目標，目的の設定を行い，それを学生に積極的に公開・告知していく。

提言 16　日吉設置学部共通科目（総合教育科目）を基盤とした，学部の枠を越えた副専攻制度，ダブルメジャー制度，学生がデザインするオリジナル専攻・副専攻制度などを視野に入れた，方向性が見えるカリキュラムの構築を行う。

○提言 17　日吉設置学部共通科目（総合教育科目）におけるカリキュラムの管理・検討・運営を統括的に行う組織を設立する。そして，この下に位置する文化知部門，社会知部門，科学知部門，複合知部門などのカリキュラム運営母体を確立し，さらには，それより小さい単位の運営母体(部会)の設立も行う。

○提言 18　教養教育をカリキュラムの核の一つと位置づけできるような学部カリキュラムを設定する。

提言 19　日吉設置学部共通科目（総合教育科目）と学部共通科目ではない「外国語科目」，「教養研究センター設置科目」，「外国語教育研究センター設置科目」，「国際センター設置科目」などの科目，さらには，他キャンパス設置の専門課程の授業との連携を確立する。

■外国語科目における習熟度別クラス編成の導入と整備

提言 20　各科目の学習目的を明確化することにより，学習目標の設定を容易にし，自発的な学習計画立案を促す。

提言 21　クラスター化した時間割編成，完全セメスター制により，柔軟かつ効果的な科目選択を可能にする。

提言 22　外部指標に基づく習熟度・達成度評価法を導入する。

提言 23　「ポートフォリオ」等による，共通基準に基づく記述的な習熟度・達成度評価法の導入を行う。

提言 24　科目履修要件と成績評価基準を明確化・客観化し，科目履修の「入口」「出口」管理を行う。

■副専攻制度

提言 25　現在各学部で行われ始めているさまざまな副専攻プログラム，または副専攻に準ずるようなプログラムを発展させて，さらには，既存の専門課程間での行き来をより拡大，自由にすることにより，慶應義塾大学型の副専攻制度を確立する。

■カリキュラムの国際化

提言 26　国際教養コース（仮称）を設置し，英語で行われる授業を体系的に履修した学生に副専攻の認証を与える。

■人事とカリキュラム編成

○提言 27　日吉設置学部共通科目（総合教育科目）のカリキュラムの運営・検討を行う組織そしてその下部組織である部門・部会が，科目担当者の人事に関する調整と各学部に対する提案を行う。

提言 28　日吉設置学部共通科目（総合教育科目）のカリキュラムの運営・検討を行う組織は，各学部の専門課程の授業を運営・検討する組織と緊密な連携を図ることにより，日吉設置学部共通科目（総合教育科目）の枠を超えた副専攻プログラムを確立する。

資料２　教員アンケート（回答数記入）

教養研究センター主催第３回　慶應義塾大学の教育カリキュラム研究シンポジウム（2011/07/11）

2010 年度　大学カリキュラムに関する教員アンケート（集計結果）*

慶應義塾大学教養研究センター

Ⅰ．一般的な事項について

あなたご自身について、それぞれあてはまる番号に○をひとつ付けてください。

問１　所属	1. 文学部 17　5. 医学部／薬学部 8 2. 経済学部 48　6. 理工学部 13 3. 法学部 26　7. 総合政策／環境情報学部／看護医療学部 45 4. 商学部 38　8. 体育研究所 9
問２　所属地区	1. 日吉 88　2. 三田 69　3. 矢上 2　4. 湘南藤沢 44
問３　大学における教育年数（非常勤を含む）	1. 5 年未満 21　2. 5～10 年未満 36　3. 10～20 年未満 72 4. 20～30 年未満 51　5. 30 年以上 24
問４　担当科目	1.　語学科目を主に担当し、加えて総合教育科目（教養科目）を担当している 45 2.　語学科目を主に担当し、総合教育科目（教養科目）は担当していない 13 3.　総合教育科目を主に担当している 22 4.　専門科目を主に担当し、加えて総合教育科目（教養科目）を担当している 38 5.　専門科目を主に担当し、総合教育科目（教養科目）は担当していない 77 6.　その他 6
問５　総合教育科目担当経験	1.　これまで総合教育科目（教養科目）を担当したことがある 136 2.　これまで総合教育科目（教養科目）を担当したことがない 59

Ⅱ．教養教育の目的について

問６　大学で身につけて欲しい具体的な教養とはどのようなことですか。（複数回答可）

1. 英語 108	5. パソコンやインターネットが使える能力 50	9. 倫理観 62
2. 英語以外の外国語 72	6. 情報検索能力 63	10. リーダーとなる資質 38
3. 文化や歴史に関する理解 146	7. 考える力や価値判断力 176	11. コミュニケーション能力 119
4. 科学・技術に関する理解 110	8. 人間性・人格形成 80	12. その他 具体的に（　　）

その他

思索する力、コミュニケーション能力は１～５に関連
協調性、人間力
一般教養
文章力
雑学、何でも可心身を健康に保つ能力感情などへの気づき
国際理解力自省する能力１０と１１は専門科目との関係で考えた方がより効果的ではないか。
問題解決力二つ以上の専門を身につけて欲しい。論文、文書作成
研究調査能力哲学、経済、法律など社会人として必要な基礎的知識人格や人間性は本来それ以前に身につけてほしい

---

* 問 13, 38, 39, 41, 42, 59 の自由記述解析は Trustia 1.0.3.0　MiningAssistant による（解析担当：木島）

問 7　大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語の能力とはどのようなものだと思いますか。（複数回答可）

1. 英語はできなくても構わない 11	5. ディスカッション能力 78	9. 論文を書く力 40
2. 日常会話程度 41	6. 英字新聞の読解力 76	10. その他 4
3. 仕事で使える程度 91	7. 小説の読解力 10	（　　）
4. プレゼンテーション能力 88	8. 論文の読解力 101	

その他

e-mail、web でのやりとり情報収集インターネットの普及により、今迄以上に読む力が必要と考える

専門分野による英語圏でのものの考え方 01

問 8　大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語以外の外国語の能力とはどのようなものだと思いますか。（複数回答可）

1. 英語以外の外国語はできなくても構わない 43	4. プレゼンテーション能力 15	8. 論文の読解力 20
2. 日常会話程度 111	5. ディスカッション能力 10	9. 論文を書く力 4
3. 仕事で使える程度 37	6. 英字新聞の読解力 20	10. その他 17
	7. 小説の読解力 7	（　　）

その他

英語が不十分であってもそれ以外の外国語を学ぶべき。

英語以外の言語世界への視野

英語が必要条件。その上でどれだけプラスできるかは個人の資質によると思います。

人によって異なる

学生の選択いかんによる

基本的な文法と簡単な文章読解の経験。基本的な語学知識よくわからない基礎的知識、理解

辞書を使えば文献を何とか読みこなせる力

新聞雑誌の読解力専門分野による基本的語彙、文法基本文法の知識

基本的な事項、いざという時に辞書があれば読める程度

その言語圏での文化、歴史

Ⅲ. 講義要綱・シラバス（以下、シラバス）について

問 9　学生は、シラバス内容を学生が理解し、シラバスを読んで履修していると思いますか。（1 つだけ）

1. そう思う 19	3. どちらかといえばそう思わない 64
2. どちらかといえばそう思う 93	4. そう思わない 25

問 10　あなたは、自分と関係する他の授業のシラバスを読んでいますか。（1 つだけ）

1. 読んでいる 29	3. あまり読んでいない 71
2. おおむね読んでいる 83	4. 読んでいない 21

問 11　電子シラバスが充実した場合、冊子体のシラバスは必要だと思いますか。（1 つだけ）

1. 従来通りのものが必要である 45	3. 授業科目名と担当者名程度のもので十分である 26
2. 簡略版で十分である 71	4. 必要ない 61

問 12　あなたの授業はシラバスの通りに進んでいますか。（1 つだけ）

1. 進んでいる 73	3. どちらかといえば進んでいない 12
2. どちらかといえば進んでいる 116	4 進んでいない 3

問 13 シラバスの形式について改善すべき点があれば、具体的にお書きください。

・**具体的・詳細**：もっと具体的な記述があるべき。分量的にあまりにも少ない。詳細に書くべきである。
・**回数（15 回）**：科目によって形式は異なることを前提にして欲しい。語学の授業では、毎回あるパターンの繰り返しになることも多いので、これを回数書き記すのは不合理。時事的な内容も扱う授業の場合、かえって探求の内容が悪くなる。ゼミの場合は無理。
・**評価方法**：評価方法等はハッキリさせ、最低でも 3 つ以上の観点からの評価を義務づけるべきである。出席を重視し、大学側はそのために支援すべきである。あいまいな「平常点」という選択肢を設けず、教員各自の観点に合った項目を示してもらうべき。
・**電子シラバス**：電子シラバスになるなら、自由記述欄を設けて欲しい。アクセスの自由度を保証することが条件。
・**冊子体**：冊子体のシラバスを数百冊用意して、希望者のみに配布すればいい。冊子体のシラバスは有料化すればよい。持ち運びが困難なので、小冊子に分けてはどうでしょうか。
・**臨機応変**：授業は人を見て進んで行くものです。クラスによっては、シラバスのスケジュール通りにはいかないものだと思います。その意味で画一的なシラバスがよいのかどうか疑問です。シラバスでは最低限の目標を明記するだけにして、後は臨機応変にした方がいい。
・**現行評価**：概ね現行でよいが、定期的に全体のシラバスとカリキュラムの主旨が一致しているか点検、確認が必要。慶應でのシラバスは米国大学（院）でのコースロースターにあたる。呼称の検討が必要。

問 14 あなたは一部学生が自主的に制作している授業紹介冊子「リシュルート」を知っていますか。(1 つだけ)

1. 知っている 109　2. 知らない 94

問 15 問 14(前問)で「1. 知っている」と答えた方へ
「リシュルート」に関してどのようにお考えですか。(1 つだけ)

1. 学生の自主的な活動として評価するべきである 24
2. シラバスの改善・工夫で対処するべきである 22
3. 仕方ないので黙認するしかない 29
4. 学生に利用しないように周知するべきである 9
5. その他具体的に 26
(　　)

その他

具体的に"お金を取るのはどうかと思う。無料にすべき。
基本的には 1 だが、ただし情報源による偏りの是正は求めたい。中身は見たことがないので、何とも言えない
公平性、正確性をより強く指導すべきである。授業評価制度を導入して対処するべきである。授業のアンケートは禁止すべき。
読んだことがないので判断のしようがありません。
無視する。存在は知っているが詳しく見ていない
もっと魅力的なシラバスを提供するべき。これが楽勝科目となるか否かは教員側の授業いかんだと思う。少人数クラスの情報が浅く、要改善。
積極的に評価するわけではないが、悪いものでもないと思う（使い方次第だと思うので)。
その内容や影響力について調査すべき。
協力的に指導すべきである。
税法上の問題が生じている可能性があり、そこをついてつぶすべき。
あってもかまわない黙認ではなく無視したいそこに慶應生のレベルがよくあらわれている。特に意見はありません私自身が学生の頃も似た様なものがあったので何も感じません。
それでいいと思う、ぐらい。
授業内容の改善、成績の公平化で対応。
可もなく不可もなく。
好意的黙認（シラバスが良くなれば自然となくなる)。
名前だけしか知らないのでよくわかりません学生の自主的活動なので学校側が干渉する必要はありません問題ない。

Ⅳ. 成績評価について

問 16 あなたは成績評価の基準をあらかじめ明らかにしていますか。(1 つだけ)

1. シラバスで明確に公表している 22
2. 授業開始後公表している 22
3. 試験の直前に公表している 22
4. 公表していない 22

問 17 あなたが主に教えている科目は単位がとりやすいと思いますか。(1 つだけ)

1. そう思う 41
2. どちらかといえばそう思う 104
3. どちらかといえばそう思わない 44
4. そう思わない 14

問 18　あなたが主に教えている科目は出席をとっていますか。(1 つだけ)

1. 毎回とっている 102	2. たまにとる 39	3. とらない 62

問 19　あなたが主に教えている科目の成績評価は、プロセスを重視して成績をつけていますか、それとも試験などの結果重視で成績をつけていますか。(1 つだけ)

1. プロセスを重視している 41	3. どちらかといえば結果を重視している 62
2. どちらかといえばプロセスを重視している 38	4. 結果を重視している 59

問 20　同類の授業ごとに成績評価の方法にばらつきがあることについてどう思いますか。(1 つだけ)

1. 問題ない 55	3. どちらかといえば改善すべきである 72
2. 問題はあるが仕方がない 54	4. ばらつきはなくすべきである 21

問 21　A・B・C の人数割合をはじめから決めておく相対評価と、一定の基準に従って割合を決めない絶対評価のどちらが、より好ましいと思いますか。(1 つだけ)

1. 相対評価 14	2. どちらかといえば相対評価 46	3. どちらかといえば絶対評価 79	4. 絶対評価 64

問 22　成績評価の基準について学生から質問されますか。(1 つだけ)

1. よく質問される 12	2. ときどき質問される 82	3. あまり質問されない 62	4. ほとんど質問されない 47

問 23　成績評価の基準について学生から質問された際、どのように答えますか。(1 つだけ)

1. あらかじめ定めた基準を示す 143	3. 基準は決めていないと答える 1
2. だいたいの基準をおおざっぱに答える 56	4. 答えない 4

V. クラス編成と学生レベルについて

問 24　同一レベル内の、あるいは授業内容が類似している授業は統一されたシラバス(教材・評価基準等)を用いるべきだと思いますか。(1 つだけ)

1. そう思う 29	3. どちらかといえばそう思わない 66
2. どちらかといえばそう思う 59	4. そう思わない 47

問 25　総合教育科目を体系的に学ぶために、一定の科目に履修要件(予備学習や他の科目の履修を履修の条件とすること)を設けることについてどのようにお考えですか。(1 つだけ)

1. 履修要件を設けても良い 72	3. どちらかといえば履修要件を設けるべきでない 16
2. 科目の目的によっては履修要件を設けても良い 104	4. 履修要件を設けるべきでない 9

Ⅵ. 授業運営について

問 26　授業内外でパソコンやインターネットを利用した教育を行っていますか。(1 つだけ)

1. はい　114	2. いいえ　60

問 27　問 26 で「1. はい」と答えた方へ
具体的に何を利用しているか以下の選択肢から選んでください。(複数回答可)

1. keio.jp の教育支援システム 71	3. 教員または授業のウェブサイト等 58	5. その他 (具体的に　　)
2. セルフラーニングサイト 8	4. メーリングリスト 60	

その他

PC の実習
SFC-SFS
SFC-SFS、Twitter
メディアセンターのデータベース
パワーポイント、資料映像授業の内容と関係のあるサイトを学生にすすめる。動画サイトリサーチの為のグーグル他、ウェブサイト情報検索ツールとしてのインターネットパワーポイントによるプレゼンメール
PPT 資料 SFC-SFS
パワーポイント
教材 You TubeSFC 英語セクションの MODLE サイト
SFC-SFSSFC-SFS
映像制作ソフト
様々なソフト
google 他企業の HP
SFC-SFSSFC-SFS
CALLSFC-SFS

問 28　問 26 で「1. はい」と答えた方へ
どのような目的に利用しているか以下の選択肢から選んでください(複数回答可)

1. 教材配布 103	3. レポート提出 61	5. お知らせ 70
2. 小テスト・即レポ 13	4. 掲示板・ブログ 30	6. その他(　　)

その他

PC の実習
実習システム情報収集
e-learning プレゼン前に要旨配布実習記録要旨のフォーマットのダウンロードなどプレゼンテーション
学生の自学自習質問受付
分析、検索論文

問 29　授業内外で学生が質問をしやすい環境を作っていますか。(1 つだけ)

1. そう思う 83	3. どちらかといえばそう思わない 15
2. どちらかといえばそう思う 103	4. そう思わない 1

問 30　不特定多数の学生が過去問や過去ノートを交換する外部のインターネット・サイトがあることを知っていますか。(1 つだけ)

1. 知っている　103	2. 知らない　97

問 31　不特定多数の学生が外部のインターネット上で、過去問や過去ノートを利用することをどのように考えますか。(1 つだけ)

1. 仕方がないので容認する 29	4. 過去問ははじめから公開するべきである 28
2. 許されない行為であることを周知させる 12	5. その他　具体的に 16
3. 授業や試験内容の工夫で対処すべきである 113	(　　)

その他

間違った正解や間違ったノートが流通しているとしたら問題である。過去問通りに出す方が問題
教師は毎回、問題やノート内容を変えるべき
まったく問題ない。学生が過去問で勉強するのは良い。教師は過去問を出題しなければよい。
気にしない全く問題ない

問 32　教授法や授業運営について具体的に、どのような工夫や勉強をしていますか。（複数回答可）

1. 主に教授法についての書物で勉強している 58
2. 同僚や先輩の先生の話を聞いて勉強している 112
3. 講習会・講演会などに参加して勉強している 38
4. とくにしていない 50
5. その他　具体的に 19
（　　）

その他
学生の反応をみて、毎年工夫をする。
レポートなどのフィードバックで検討している。
前の年の経験に基づく。
実際の授業の反応を見て工夫している、他の授業を参考にしている。
自分で反省する。
他人のプレゼンを参考にする。
授業での学生の反応を見ながら、授業に新しい試みや工夫を取り入れます
FD アンケートを参考にしている若い頃 1～3 を行った
学生の意見を参考にする独自に工夫学生に理解度を直接伺う他大学（米国ビジネススクールのシラバス等をチェック）
関連する本を読む。
学生の理解度を見て、工夫が生かされているか検討している
もっぱら、学生の態度・答案を参考にする。

問 33　授業を理解していない学生について、どのようなケアをしていますか。（複数回答可）

1. オフィスアワーなどを設けている 66
2. 電子メールでの質問を受け付けている 83
3. 補習の時間を設けている 10
4. とくにケアしていない 73
5. その他　具体的に 28
（　　）

その他
学生の反応をみて、毎年工夫をする。
レポートなどのフィードバックで検討している。前の年の経験に基づく。
実際の授業の反応を見て工夫している、他の授業を参考にしている
自分で反省する他人のプレゼンを参考にする
授業での学生の反応を見ながら、授業に新しい試みや工夫を取り入れます
FD アンケートを参考にしている若い頃 1～3 を行った
学生の意見を参考にする独自に工夫学生に理解度を直接伺う他大学（米国ビジネススクールのシラバス等をチェック）
関連する本を読む
学生の理解度を見て、工夫が生かされているか検討している
もっぱら、学生の態度・答案を参考にする。

問 34　学生に対するメンタルケアについての教員対象の講習会に、教員は参加するべきだと思いますか。（1 つだけ）

1. するべきである 83
2. どちらかといえばするべきである 103
3. どちらかといえば必要ない 15
4. 必要ない 1

問 35　学生相談室では学生のメンタルケアを受け付けていますが、学生相談室を知っていますか。

1. 知っている 169
2. 名前は知っているが場所は知らない 24
3. 知らない 10

Ⅶ. 授業評価について

問 36　自分の授業について、何らかの形で学生からフィードバックを受けていますか。(1 つだけ)

1. 必ず受けている 87	3. あまり受けていない 34
2. だいたい受けている 59	4. 受けていない 20

問 37　学生アンケートなどの方法による授業評価は必要だと思いますか。(1 つだけ)

1. 必要 77	3. どちらかといえば必要ない 33
2. どちらかといえば必要 76	4. 必要ない 17

問 38　問 37 で「必要(1 または 2)」と答えた方へ　その理由を具体的に書いてください。

・**フィードバック**：学生からのフィードバックにより、適切な対応を行うことはプロとしては必要だと思います。
・**独善的**：独善的な授業にならないようにするため。
・**改善**：授業の内容、質向上のため。授業を工夫、改善することができる。客観的な評価がなされるかは疑問があるが、プラス面にしても、マイナス面にしても教える側が気づかない指摘があり参考になることがある。
・**学生の意見**：履修者の建設的な意見は受付けるべき。学生側の授業に対するコメント、フィードバックは授業運営向上に役立つ
・**大教室**：大教室での授業では一方通行になってしまうので。
・**満足度向上**：学生の満足度向上のために必要。
・**ニーズ**：学生のニーズに対して、成果を出せる様、努力する必要がある。
・**欠点**：教授法で自分が気づかない欠点を学生が指摘してくれる。学生の自由意見は反省材料になる
・**FD**：FD に効果的だから
・**SFC**：SFC は「教員が授業評価を受けることは業務の一部」という文化なので「必要な理由」を問われること自体にひどく驚きました。日吉や三田との感覚の違いを痛感します。

問 39　問 37 で(「必要ない」3 または 4)と答えた方へ
その理由を具体的に書いてください。

・**学生の問題**：不満のある学生しか答えないので偏った情報しか出てこない。アンケートが形骸化してそれが学生の負担になることを危惧する。一部の学生しか応えて（答えて）いないのにそれを全体の意見として解釈することの問題。半数近い学生が「単位を下さい」「遅刻の扱いが厳しい」などの要望を書き、授業の改善に資する回答が少ない。1・2 度来ただけの学生に評価はできない。無責任ななぐり書き、中傷などが多い
・**授業内で十分**：授業時にコミュニケートすべき問題。過去、各種アンケートを積極的にとっていた時期があるが、役立ったことはない。無記名の場合の批判的回答は無責任かつ、不熱心な学生のものがほとんど。記名の場合、有益な批判的回答はあまりつかない。
・**評価のあり方**：授業改善の方法として授業評価は不適切と考える。改善点を具体的に指摘してもらえるような工夫をした方が良い。フィードバックは必要だが、評価はおかしい。良い評価を得たとしても、現在はそれが教員の昇進や研究面での待遇に何ら反映されない。
・**教師の自主性**：フィードバックは各教師が自主的に頻繁に行うべき。教員の自主性にまかせて下さいませんか。私は自分が知りたいことを学生に聞いています。
・**単位取得の難易度**：単位のとりやすさを評価されても意味がない。楽勝科目が評価されやすい。「評価」自体については経験上、単位取得の難易度によって左右される場合が多いため、余り有効ではない。

問 40　学部全体で統一的な授業評価を導入すべきだと思いますか。(1 つだけ)

1. するべきである 33	3. どちらかといえばするべきでない 60
2. どちらかといえばするべきである 65	4. するべきでない 39

問 41　問 40 で「するべき（1 または 2)」と答えた方へ。その理由を具体的に書いて下さい。

・**学部あるいは全塾**：全塾的に教育環境を向上する必要があるから。各自に委ねるのは学部という組織にとって不利益となる。教員によって異なることの大きさはあまりない方が良いと思う。学部としてどのような教育を目指すのかというコンセンサスが反映されるべき。各自で勝手にやっても意味がない。するならば学部単位ではなく、大学全体でするべきと考えるため。授業評価をしている科目とそうでない科目があるのは望ましくない。全体で導入しなければ問題点が浮かび上がらない。主要大学で授業別評価をやっていないのは今や慶應のみ。まことに恥ずかしい現状を至急改めるべき。半教半学の福沢精神が泣いている。学部全体で授業の改善を行う時に必要。

・**評価基準**：各部会（学部ごとに違うが）がおよその評価基準を明確にした方が良い。
・**フォーマット**：授業内容、分野によって、ある程度、項目を選択出来る様な形で、共通のフォーマットがあれば便利
・**比較**：相互に比較可能になる（個人間、時系列的）。教員の相対的評価に必要。
・**現状把握**：授業内容が大変おとっている教員がいると学生からきいている。現状は把握すべきである。あまりにひどい講義をする教員をなくす。
・**法学部**：法学部では一応の標準スタイルの授業評価アンケート用紙があり、このやり方で授業の終わりにアンケートを実施し、集計も FD 委員会（実際は教務課事務）にやってもらって、自己評価を記述するという形式をとっていて、それならば教員の負担も少なくてすんでいる。
・**SFC**：SFC 全体で既に取り組まれている。Web ベースなので、回答率が良くない年度もあるが、少なくとも学生たちが意見を言える一つの窓口だと思うので、重要だと考える。

問 42　問 40 で「するべきでない（3 または 4）」と答えた方へ　その理由を具体的に書いてください。

・**不可能**：不可能でありナンセンスである。
・**多様性**：学問領域ごとに教授法は様々であるので統一（画一）した評価はすべきではない。形式、目的が異なるのだから、統一は無理。
・**個性**：教員の個性を活かした授業を尊重すべきだから。個性的な授業展開ができなくなるので。大学は個人的な授業があってよいと思うので。
・**自主性**：授業評価はあくまで自分（教員）の自己改善のためのものであって、強制されるべきものではない。教員の自主性に任せるべき。
・**自由記述**：数値化された授業評価よりも自由記述式の方が教員にとって参考となる。
・**金の無駄**：授業評価が教員の待遇や給与に反映されるわけでもなく、まったく効果がない上、紙と労力の無駄になるだけ。
・**迎合**：非常勤講師がアンケート結果を気にして、学生に迎合する虞れがある。

Ⅷ. カリキュラム編成、クラス編成について

問 43　担当科目が学部カリキュラムの中でどのように位置づけられているか知っていますか。（1 つだけ）

1. 知っている 136	3. あまり知らない 8
2. だいたい知っている 50	4. 知らない 6

問 44　学部のカリキュラムについてよく理解していますか。（1 つだけ）

1. よく理解している 51	3. あまり理解していない 84
2. だいたい理解している 118	4. 理解していない 27

問 45　他学部、研究所、センターのカリキュラムと、所属学部・研究所のカリキュラムの関係について理解していますか。（1 つだけ）

1. よく理解している 19	3. あまり理解していない 84
2. だいたい理解している 72	4. 理解していない 27

問 46　三田・日吉の学部共通科目についての調整を行う学部共通カリキュラム検討委員会、およびその下部組織である日吉共通カリキュラム検討委員会の存在を知っていますか。（1 つだけ）

1. 知っている 122	2. 知らない 79

問 47　学部共通カリキュラム検討委員会・日吉共通カリキュラム検討委員会の役割や活動について知っていますか。（1 つだけ）

1. 知っている 25	3. あまり知らない 50
2. だいたい知っている 58	4. 知らない 68

問 48　教養研究センターが、継続的に慶應義塾大学のカリキュラムについて研究し、報告書や提言を出していることを知っていますか。（1 つだけ）

1. 知っている 60
2. だいたい知っている 36
3. あまり知らない 50
4. 知らない 68

問 49　大学生にクラス担任は必要だと思いますか。(1 つだけ)

1. 必要 42
2. どちらかといえば必要 64
3. どちらかといえば必要ない 54
4. 必要ない 39

問 50　担任の役割として、以下のうち、どのようなことが適当と考えられますか。(複数回答可)

1. 学生のプライベートな相談にのる 62
2. 学生の学業に関する相談にのる 122
3. 学生を集めて親睦会を開く 21
4. 学生を集めて、デイキャンプなどに連れて行く 4
5. 定期的に学生を集めて話し合いの機会を持つ 27
6. 担当学生の事件・事故などの特別なときの対応 77
7. その他　具体的に　21
(　　)

その他
（具体的に）"担任は制度として機能していないし、必要ない。学生の自立を促すようなケア（世話をやかないことを知らせる）
必要ない気軽に話せる教員側への窓口
担任の裁量に任せる。担任が学生の問題を抱え込むのではなく、対応先を紹介する窓口になれれば良い。担任は必要ない。
少人数授業を必修に地て、その担当者を担任にすべき。
専門の部署への橋渡し、紹介
不要１：３０ではできません。１：１０くらいに下げる必要がある。奨学金の推薦状作成（ゼミに所属していない学生の場合）不要
推薦状を各程度の役割学生と大学をつなぐ窓口の一つとして
健康面（特にメンタル）への相談、不調の発見
必要ないと思います三田の教員がゼミ生に対して行うあらゆる事項の指導
入学時のガイダンスの際の役割が重要だと思う。
学生同士が知り合うコーディネーターとして重要とくに一年生に対し、クラスという自分の居場所をつくるため

Ⅸ. 半期制について

問 51　2005 年度以降三田・日吉キャンパスで、現行の通年半期制といわれる制度（科目は基本的に半期制で半期ごとに成績がつくが、履修登録等は原則春のみの制度）が導入されていますが、これについてどのように思われますか。(5 年以上在籍した方のみお答えください)(1 つだけ)

1. 通年半期制になって良かった 37
2. どちらかといえば良かった 57
3. どちらかといえば良くなかった 21
4. 良くなかった 21
5. 該当しない 19

問 52　現行の通年半期制で良いと思われる点は、どのような点ですか。(複数回答可)

1. 学生の単位が取りやすくなった 41
2. 授業の選択肢が増えた 73
3. 学生が留学しやすい 79
4. 学生の再チャレンジが容易である 37
5. サバティカルが取りやすい 21
6. 授業運営のメリハリがつけやすい 59
7. カリキュラムの内容が豊富になった 22
8. カリキュラムの段階的組み立てが可能になった 16
9. 学生に対してきめ細かい指導が可能になった 9
10. その他　具体的に 6
(　　)

その他
半期制への移行過程として評価カリキュラムが分かりやすくなった実質的にそれまでも半期単位であったので変わっていない。
よく知らない
春学期に学生がやる気になる学生の緊張感に持続に半年が適当

問 53　現行の通年半期制で問題だと思うのは、どのような点ですか。（複数回答可）

1. 成績作業が繁雑である 29
2. 半期で十分内容を伝えられない 34
3. 学生が安易に授業を切ることが多くなった 49
4. 原則的に秋学期に履修登録ができないので半期制にした意味がない 83
5. 要件科目を設定しにくいので内容が希薄になった 10
6. カリキュラムの構成が学生にとってわかりにくい 16
7. セット履修が多すぎあまり意味がない 33
8. 学生の入れ替わりが多く関係が希薄になった 7
9. 夏休みに課題を課せられない 29
10. その他　具体的に 9
（　　）

その他

３が重大。秋学期は就職活動のため、授業に出ないのが問題。ガイダンスを実質２回やるのは時間の無駄。SFC のように完全なものではない
体系的な科目の復習が期待できなくなった。体系性の強い学問領域においては半期制は全くのナンセンス
文科省が言うような 15 週も大切だが一年間とおしてこれを身につけるという長期タームでの学習が今の学生に不可欠
半期制と言いながら通年（セット）であること
完全半期制にすべき
語学は半期では何もできない

問 54　半期制について、今後どのようにするのが良いと思いますか。（1 つだけ）

1. 秋学期履修登録を行う半期制に移行するべきである 26
2. 問題点を改善して通年半期制を維持するべき 65
3. 現状のままでよい 95
4. 通年制に戻すべきである 10

X. 研究と教育の関係、その他のバランスについて

問 55　あなたは、研究と教育に、どの程度の割合の時間を割いていますか。（1 つだけ）

1. 研究 8～9 割、教育 1～2 割 14
2. 研究 6～7 割、教育 3～4 割 48
3. 研究 5 割、教育 5 割 56
4. 研究 3～4 割、教育 6～7 割 58
5. 研究 1～2 割、教育 8～9 割 25

問 56　大学常勤教員は本来、研究と教育に、どの程度の割合の時間を割くのが理想だと思いますか。（1 つだけ）

1. 研究 8～9 割、教育 1～2 割 26
2. 研究 6～7 割、教育 3～4 割 65
3. 研究 5 割、教育 5 割 95
4. 研究 3～4 割、教育 6～7 割 10
5. 研究 1～2 割、教育 8～9 割 1

問 57　あなたの所属学部・研究所の教育カリキュラムは概して妥当だと思いますか。（1 つだけ）

1. そう思う 40
2. どちらかといえばそう思う 107
3. どちらかといえばそう思わない 35
4. そう思わない 17

問 58　あなたの所属学部・研究所の教育カリキュラムは見直しが必要だと思いますか。（1 つだけ）

1. 大きな見直しが必要である 29
2. 一部見直しが必要である 120
3. 見直しはあまり必要ない 24
4. 見直しは必要でない 10
5. わからない 17

XI. 自由記述

問 59 慶應義塾大学の教育カリキュラムについてのお考えを自由に記述してください（別紙を添付してくださってもけっこうです）。

・**国際化**：半期性にして、国際化するべき。あるいは、通年にして夏休みを活用すべき。
・**学部横断**：学部を超えて統一的なカリキュラムを編成すべきである。
・**カリキュラム**：カリキュラムはいいが、授業の内容を充実させるべき
・**評価**：カリキュラム、シラバス、制度（秋登録）等に改善の余地があると思われます。しかし、最も問題なのは評価方法の枠組だと思います。
・**英語**：3 年次にゼミに入って来る学生の英語の貧弱さに驚かされる。入試の英語は相当の勉強を必要とするレベルであるが、2 年間を経るとかくも劣化するものかと思う。

・**ネット**：ネットを活用した効果的な授業展開など、新しく便利なツールや環境を活用できるような支援を期待する

・**単位数**：一科目 4 単位にし、週二回授業すべきである。現在のやり方は学生の履修する科目が多すぎて充分学べない。

・**重複**：学部ごとに教養科目が設置され、内容が重複している科目も多いので、その点を見直すべきだと思う。

・**各学年の問題**：1、2 年生の固定的な語学の必修授業に代え、いつでも、必要なときに、必要な語学を集中的に習得出来るようなシステムを構築すべきではないか。3 年秋～4 年春のほぼ一年間の教育が空洞化している。

・**慶應**：他の大学の動向や文部科学省の顔色を眺めながらカリキュラムをころころ変える必要がない。慶應義塾が長年慈しみ培ってきた心と精神は永遠に讃えなければなりません。

・**研究**：もう少し研究機関がとれるものと思って赴任したが、想像以上に教育の負担が大きい。これ以上、教育や学部運営の仕事が負担させられるならば、研究の質は落ち、激化する国際競争には勝ち目がありません。

・**日吉**：日吉では 1・2 年生が 3・4 年生あるいは大学院生と接する機会が少なく、学生間の教育効果が少ない。大多数の教員が賛同するような教養教育の理念が慶應の日吉にまだできていないことが問題である。

・**SFC**：SFC の教員にとっては、意味がよくわからない所があった。SFC の教員ですが、全体に時代遅れのアンケートの感があります。

資料３　教員アンケート結果のまとめ

教養研究センター主催 第３回. 慶應義塾大学の教育カリキュラム研究シンポジウム
「2010 年度　大学カリキュラムに関する教員アンケートの結果より」

2011 年 7 月 11 日
まとめ：　佐藤望

I. 回答数
・総回答数 204（回答率 30.4%）

II. 教養教育の目的について
・慶應の教員は、具体的なスキルの習得より、考える力や判断能力、コミュニケーション能力を重視している。
・英語は、論文読解力が最も重視されており、次いで仕事で使える英語、プレゼンテーション能力となっている

III. シラバス、講義要項について
・シラバスについては、簡略化した方がよいという考えから、もっと詳しく書くべきだという意見までかなり幅広い意見がある。
・成績評価方法を明確にすべきだという自由記述意見が目立った。
・「リシュルート」については、消極的容認・黙認という態度が目立ったが、一部の教員は大きく問題視している。

IV. 成績評価について
・プロセス重視の評価と結果重視の評価では、結果重視と考える教員の方が多い（６２%）。
・成績評価のばらつきについて、現状を肯定する意見が半数以上を占めた（５３%）。
・成績の相対評価が望ましい考える教員は、少数であった（２９%）。

V. クラス編成
・履修要件を設けることに問題はないとする教員が圧倒的多数を占めた。
・同一レベル、目的同一のクラスが、同一のシラバスを使うべきであるかどうかについては、５５%の教員がその必要はないとかんがえている。

VI. 授業運営について
・IT の活用、質問の受け方などの工夫は、教員によって個人差が非常に大きい。
・一部の学生は、熱心に工夫をしている。授業規模なども関係して、学生とコミュニケーションが取れていない場合も多いようである。

VII. 授業評価について
・授業評価の関心は非常に、高い。
・アンケート形式の授業評価の必要性については、多数（７５%）の教員が肯定的である。
・学部で統一したアンケート調査が必要かに関しては、賛否は半々（ともに５０%）。

・授業評価が改善につながらないという意見も根強い。

VIII.　カリキュラム編成

・学部のカリキュラム構成については、ほとんどの教員が理解している。（９３％）

・学部共通カリキュラム検討委員会、日吉共通カリキュラム委員会の存在は、６１％の教員が知っているが、その活動内容について知っている教員は、４１％と低くなる。

・教養研究センターのカリキュラム研究の提言について、知っている教員は４５％で、半数以下である。

IX. 半期制について

・通年半期制について、かつての通年制度を知っている教員の６９％が肯定的に評価しており、８１％の教員が、現状のまま、もしくは問題点を改善しつつ維持させるべきと考えている。

・理由は、学生の選択肢の増加、留学しやすさなどが、多く挙げられた。

・通年半期制の問題点で、最も多く挙げられたのは、秋学期に履修登録できないことである。次いで、学生が安易に授業を切るようになったことが挙げられている。

X. 研究と教育

・研究と教育の割合は、多くの教員が、理想的には研究により多くの時間を割きたいと考えているが、実際に教育よりに比重をおいている。

・各学部のカリキュラムは、マイナーな変更の必要があっても、全体としては大きく帰る必要はないと、多くの教員が考えている（７５％）

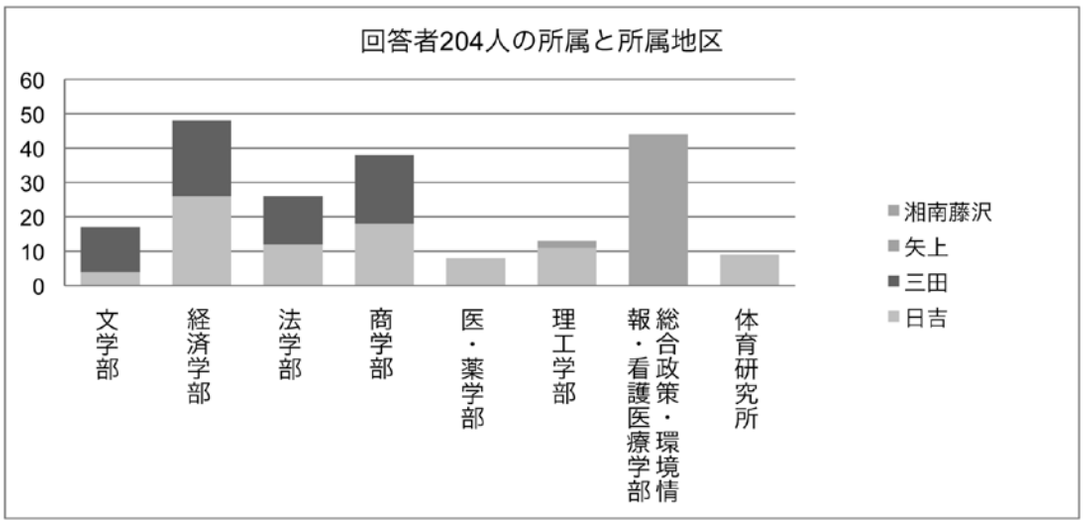
資料 4　クロス集計グラフ

「大学カリキュラムに関する教員アンケート」結果より

佐々木美帆

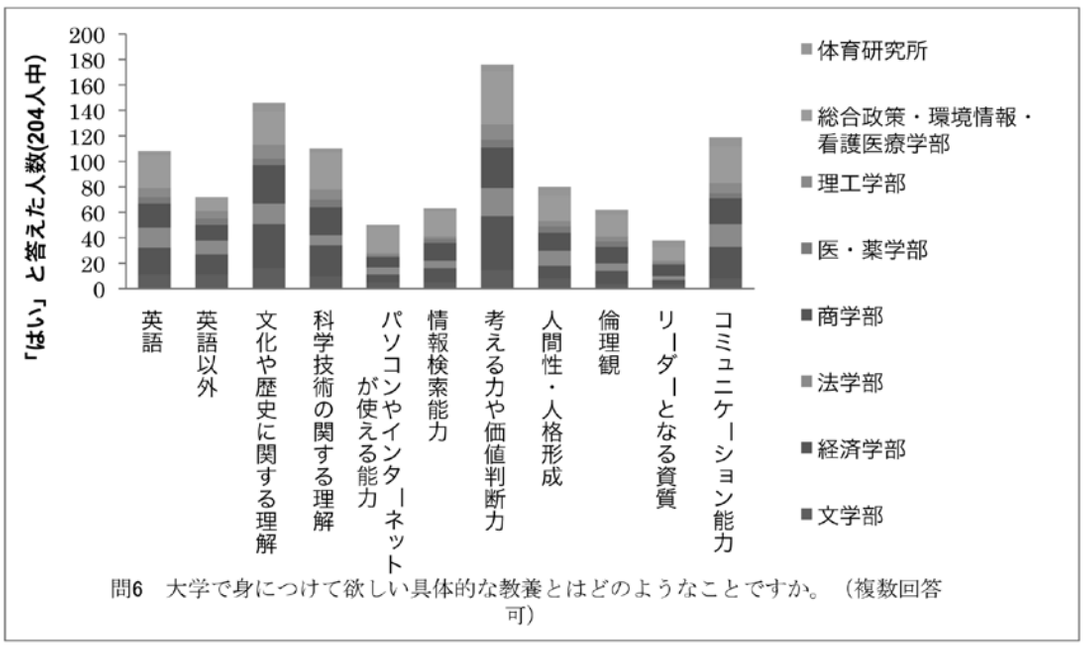
I. 一般的な事項

問 1＆問 2 所属と所属地区



II. 教養教育の目的

問 6　大学で身につけて欲しい具体的な教養とはどのようなことですか。（複数回答可）

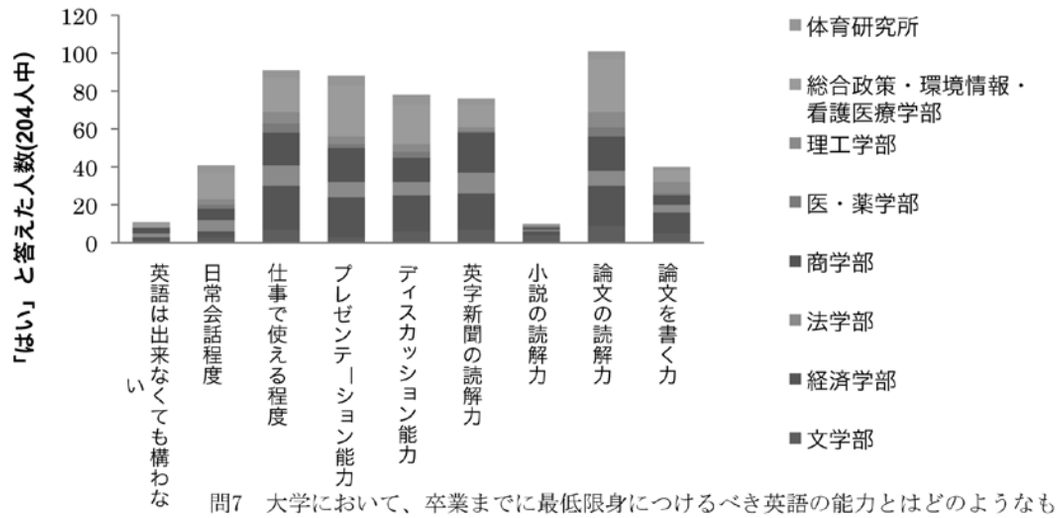


問6　大学で身につけて欲しい具体的な教養とはどのようなことですか。（複数回答可）

・「考える力や価値判断力」が一番多く全体の 86.3%（とくに総合政策他 93.3%）。それに続いて「文化や歴史に関する理解」(71.6%)「コミュニケーション能力」(58.3%)。「英語」は専攻の影響が見られて全体の 52.9%　（文学部 64.7%、体育研究所 33.3%）（三田 59.4%、日吉 45.5%）

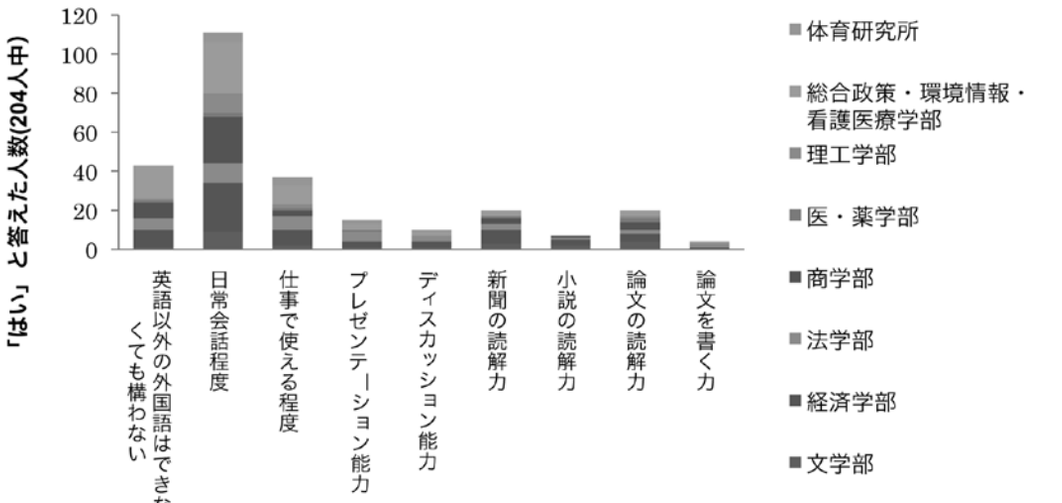
1

問 7　大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語の能力とはどのようなものだと思いますか。（複数回答可）



問7　大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語の能力とはどのようなものだと思いますか（複数回答可）

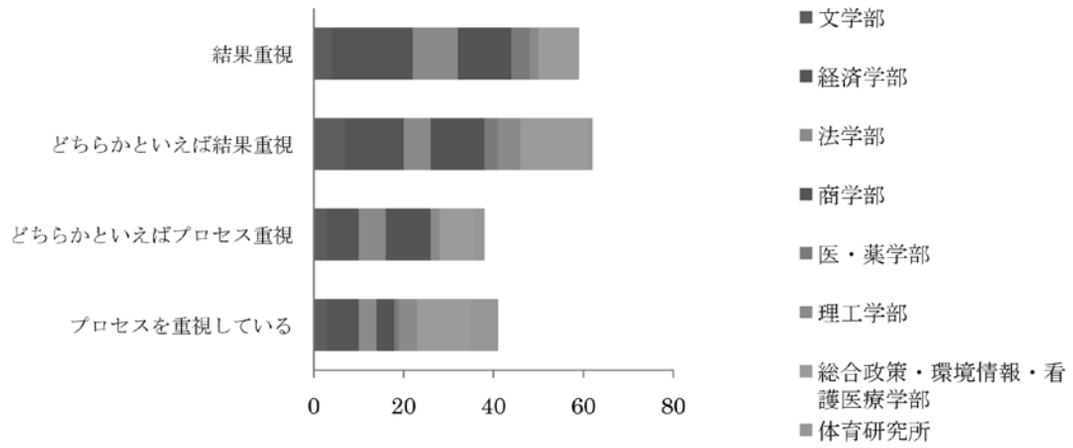
問 8　大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語以外の外国語の能力とはどのようなものだと思いますか。（複数回答可）



問8　大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語以外の外国語の能力とはどのようなものだと思いますか（複数回答可）

・全体の 54.4%が英語以外の外国語で「日常会話程度」できるようになってほしいと考えている。

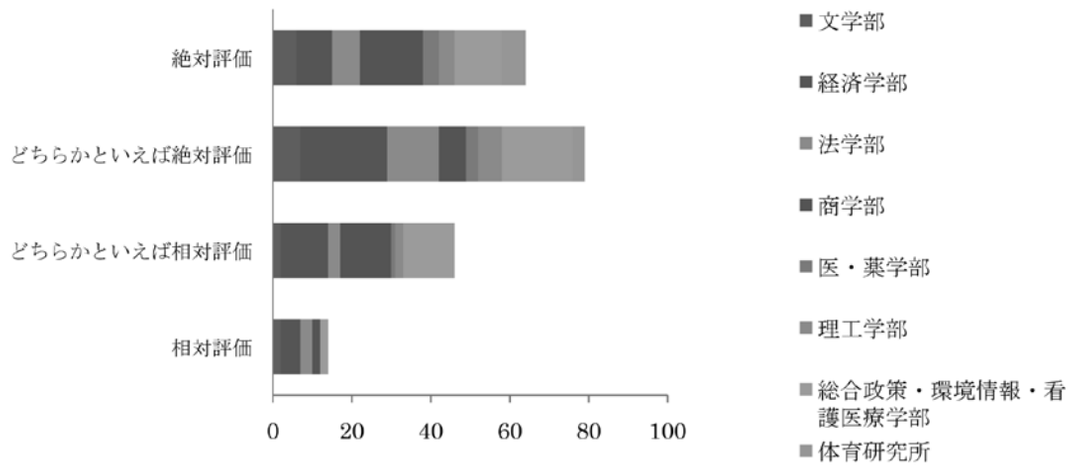
問 19　あなたが主に教えている科目の成績評価は、プロセスを重視して成績をつけていますか、それとも試験などの結果重視で成績をつけていますか。（１つだけ）



問19　あなたが主に教えている科目の成績評価は、プロセスを重視して成績をつけていますか、それとも試験などの結果重視で成績をつけていますか。（１つだけ）
（204人中）

・結果重視がプロセス重視よりやや多い（「結果重視」と「どちらかといえば結果重視」と答えた教員は全体の 60.5%）。科目や受講人数と関連すると考えられる。

問 21　A・B・C の人数割合をはじめから決めておく相対評価と、一定の基準に従って割合を決めない絶対評価のどちらが、より好ましいと思いますか。（１つだけ）

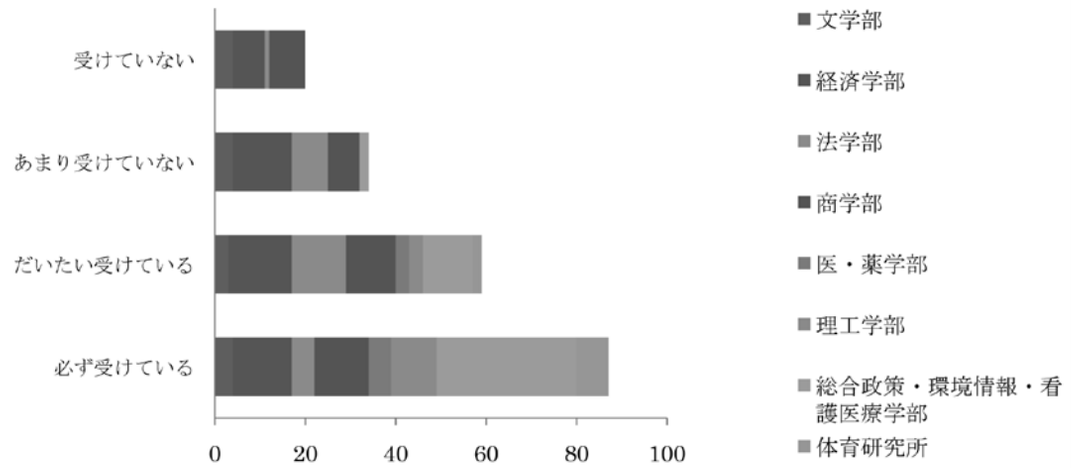


問21　A・B・Cの人数割合をはじめから決めておく相対評価と、一定の基準に従って割合を決めない絶対評価のどちらが、より好ましいと思いますか。（１つだけ）
（204人中）

・絶対評価をより好ましく考える教員が多い（全体の 70.4%）。

VII. 授業評価について

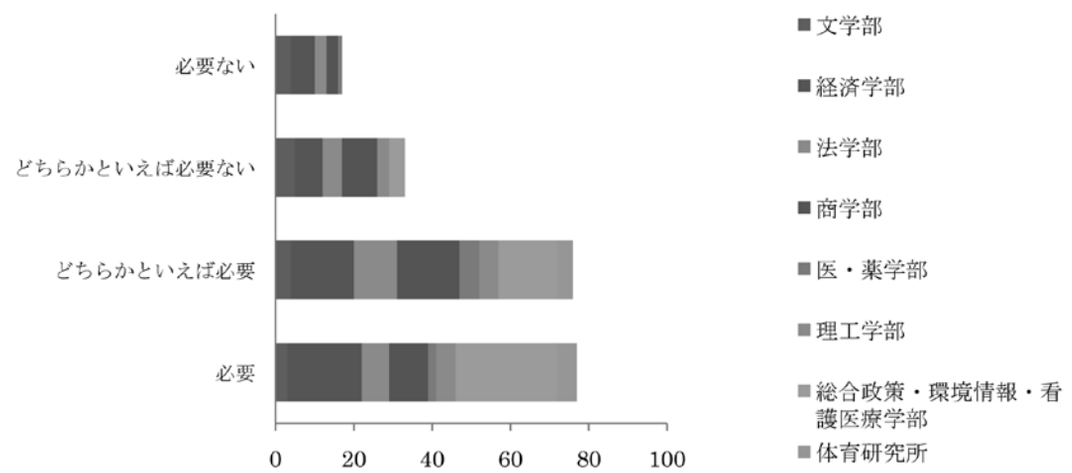
問 36 自分の授業について、何らかの形で学生からフィードバックを受けていますか。（１つだけ）



問36　自分の授業について、何らかの形で学生からフィードバックを受けていますか。（１つだけ）　（204人中）

・何らかの授業評価を学生から受けている教員が多い（全体の 73.0%）。

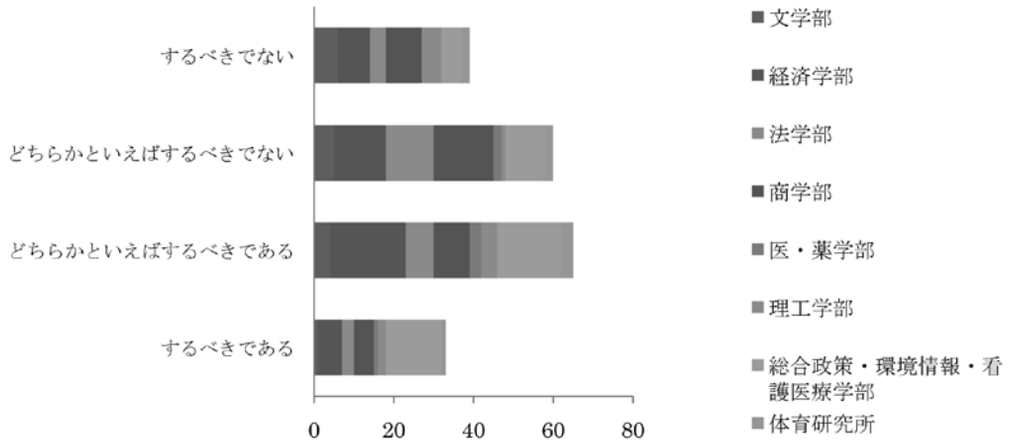
問 37 学生アンケートなどの方法による授業評価は必要だと思いますか。（１つだけ）



問37　学生アンケートなどの方法による授業評価は必要だと思いますか。（１つだけ）　（204人中）

・学生による何らかの授業評価が必要だと考える教員が多い（全体の 75.3%）。

問 40　学部全体で統一的な授業評価を導入するべきだと思いますか。（１つだけ）



問40　学部全体で統一的な授業評価を導入するべきだと思いますか。（１つだけ）
（204人中）

・統一的な授業評価導入については意見が半分に分かれた。「（どちらかといえば）するべきである」が全体の 49.8%で「（どちらかといえば）するべきでない」が 50.2%

パネリスト紹介（発言順）

佐藤　望（さとう・のぞみ）商学部教授、教養研究センターコーディネーター
専門領域は、西洋音楽史、特に 17 ～ 18 世紀ドイツ音楽史、音楽理論研究。教養研究センターの活動を通じて大学教育研究にも関わる。著書に『ドイツ・バロック器楽論』（単著、慶應義塾大学出版会、2005 年）、『アカデミック・スキルズ－大学生のための知的技法入門』（編著、慶應義塾大学出版会、2006 年）などがある。2003 年以来、教養研究センター基盤研究の幹事としてカリキュラム研究に継続して関わってきた他、2005 ～ 2008 年まで教養研究センター副所長を務める。2011 年度より基盤研究（カリキュラム研究）座長。現在慶應義塾大学商学部学部長補佐。音楽学博士。

木島　伸彦（きじま・のぶひこ）商学部准教授、教養研究センター所員
慶應義塾大学大学院博士課程社会学研究科単位取得満期退学。精神・神経センター精神保健研究所研究員、障害者職業総合センター研究員などを経て現職。
専門はパーソナリティ心理学、異常心理学。特にクロニンジャー理論を専門としている。共著に、『抑うつの臨床心理学』、『組織心理測定論：項目反応理論のフロンティア』などがある。
日吉キャンパスでは、研究、教育のほかに、学生相談室のカウンセラーも担当している。

石井　明（いしい　あきら）　経済学部教授、教養研究センター所員
慶應義塾大学経済学部教授。音楽学博士。アメリカ、イーストマン音楽院（ロチェスター大学）演奏科卒。インディアナ大学大学院古楽科を経て 89 年、デューク大学大学院へ編入学。91 年修士号取得。99 年博士号（PhD 音楽学）取得。日吉キャンパスにおいてさまざまな研究・教育活動に携わっている。その一つとして 18 世紀の演奏習慣の実習を目的に慶應義塾コレギウム・ムジクム・オーケストラを主宰、指導を行っている。

ディスカッサント紹介

金田一　真澄（きんだいち・ますみ）　理工学部教授、教養研究センター所員
慶應義塾大学理工学部教授。早稲田大学理工学研究科修士課程修了、同大学文学研究科修士課程修了。東京大学人文科学研究科博士課程修了。文学博士。専門：ロシア語学・言語学。著書：『ロシア語時制論』三省堂、『モスクワのロシア語入門』三省堂、『1 ヶ月速習ロシア語』NHK 出版、『ロシア文学への扉』慶應義塾大学出版会、『身近なレトリックの世界を探る』慶應義塾大学教養研究センター、その他『岩波ロシア語辞典』や『コンサイス露和辞典』の共編など。大学役職は、慶應義塾大学理工学部日吉主任（2001 ～ 03、2009 ～）。外国語教育研究センター所長（2005 ～ 07）。日吉カリキュラム検討委員会委員長（2009 ～ 11）など。

長谷山　彰（はせやま・あきら）　常任理事、教養研究センター所員
1975 年慶應義塾大学法学部卒業。1979 年慶應義塾大学文学部卒業。1984 年同大学院博士課程単位取得満期退学。駿河台大学法学部教授を経て 1997 年 4 月より慶應義塾大学文学部教授。2001 年より 2005 年まで慶應義塾大学学生総合センター長を務める。2007 年より文学部長、斯道文庫長。2009 年 6 月 15 日より常任理事。日本法制史専攻。法学博士。著書に『日本古代の法と裁判』（創文社）、『律令外古代法の研究』（慶應義塾大学出版会）『新　裁判の歴史』（共著、成文堂）などがある。

慶應義塾大学教養研究センター第10回シンポジウム
慶應義塾大学の教育カリキュラム研究③
これでいいのか？　日吉のカリキュラム
―授業評価・半期制…カリキュラムに関する教員アンケート2011結果から―

2012年3月31日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　不破有理

〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL　045-563-1111（代表）
Email　lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts/hc.keio.ac.jp/

©2012 Keio Research Center for Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。